

●国際連合大学 2015-2016 年国際教育交流事業●

韓国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書

ソウル・慶尚北道/仁川・釜山

2016年7月12日(火) — 7月18日(月)

国　　際　　連　　合　　大　　学 (UNU)
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

はじめに

国際連合大学（United Nations University）は、持続可能な人類の安全保障、気候変動、開発、平和構築など、国連とその加盟国が直面している、喫緊の地球規模の諸問題の解決への取り組みに、研究、教育、能力開発、知識の普及を通じて寄与することを目的とする国連機関です。

国際連合大学は、**2002** 年に主にアジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的とし、日本政府からの拠出金とともに「日本国際教育交流プロジェクト」を開始しました。**2000** 年に設立された「ユネスコ青年交流信託基金」で実施されていた「韓国教職員招へいプログラム」は、同年より本事業のもとで開催されることとなり、同大学からの委託を受けてユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施を担当し、今まで **16** 回にわたり、**1,877** 名の韓国の教職員を日本に招へいしてきました。

2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 **10** 名程度の日本教職員を韓国へ派遣してきました。これら交流事業の成果が韓国政府に高く評価され、**2005** 年からは韓国政府と韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして、参加人数を **20** 名へ倍増し日韓教職員相互交流が実施されました。**2008** 年のプログラムからは、招へい人数をさらに倍増し、さらなる交流の発展を目指すこととなりました。

2016 年 **7** 月 **12** 日（火）から **7** 月 **18** 日（月）に実施された「韓国政府日本教職員招へいプログラム」では、**2016** 年 **2** 月に韓国の教職員の受け入れにご協力いただいた自治体や学校の教職員および **2017** 年 **1** 月に受け入れていただく予定の自治体や学校の教職員と、公募により選抜された教職員が参加し、ソウル市、慶尚北道（キョンサンブクト）安

東（アンドン）市、仁川（インチョン）市での学校および教育文化施設等の訪問を通して、韓国における教育の現状と課題、訪問都市の教育の特徴、及び両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、韓国の教職員、児童生徒との交流を図ることができました。

このたびの訪問が、韓国の教育や文化に対する参加教職員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日韓の教職員間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つよう願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、韓国ユネスコ国内委員会、文部科学省、及び慶尚北道教育庁、仁川広域市教育庁、訪問先の学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2016 年 9 月
国際連合大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

●国際連合大学 2015-2016 年国際教育交流事業●

韓国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書

ソウル・慶尚北道/仁川・釜山

2016年7月12日(火) — 7月18日(月)

はじめに

1. 実施概要	1
2. 教育関連機関	3
3. 学校訪問	9
4. スタディツアーア・ホームビジット	22
5. 成果・これから活動	27
資料	45

国際連合大学(UNU)
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)

1. 実施概要

韓国政府日本教職員招へいプログラムは、**2000**年度から実施されている韓国教職員招へいプログラムと対応するプログラムで、**2003**年から日本の教職員を韓国へ派遣してきた。これらの交流事業の成果が韓国政府に評価され、**2005**年からは参加人数を倍増し、韓国政府と韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして実施されることとなった。**2007**年には、文龍鱗（ムン・ヨンリン）元韓国教育部長官からの招請により、中曾根弘文元文部大臣を団長として日本教職員**29**名が韓国を訪問した。**2016**年までにのべ**567**名の教職員を韓国に派遣し、両国の教職員の交流を深め、日韓両国間の相互理解と促進に貢献してきた。

今回の韓国政府日本教職員招へいプログラムでは、日本の教職員等**48**名が**2016**年**7**月**12**日から**7**月**18**日の**7**日間にわたり韓国を訪問した。訪問団の構成は、参加者として、1) **2016**年**2**月に国際教育交流事業のもと、日本を訪問した韓国教職員を受け入れた教育委員会より推薦された教職員、2) 同年訪問した東京近郊の学校の教職員、3) **2017**年**1**月に韓国教職員の受け入れにご協力いただく教育委員会より推薦された教職員、4) 公募により選抜された教職員の計**43**名および、国際連合大学、文部科学省、ユネスコ・アジア文化センターの同行者を含めた**48**名である。訪問団の団長は、北海道羅臼町教育委員会の金澤裕司自然環境教育主幹であった。

7月**11**日、成田ビューホテルで、訪問にあたってのオリエンテーションが実施された。国際連合大学サステイナビリティ高等研究所の古田知美事務局長、文部科学省国際統括官付ユネスコ振興推進係長の岡本彩氏、ユネスコ・アジア文化センターの堀江振一郎事務局長、団長を務める北海道羅臼町教育委員会自然環境教育主幹の金澤裕司氏、副団長を務める千葉黎明高等学校副校长の根本

明彦氏のあいさつののち、文部科学省生涯学習政策局参考官付外国調査係の松本麻人氏より「韓国の教育事情」と題した講義があり、現状や課題について具体的な説明を受けた。その後、持続可能な開発のための教育（ESD）の理解を深めるためのグループワークを行い、個々のESDについての知識を共有したり、学校での取組みを紹介したりし合う時間が設けられた。その後、プログラム中の役割分担、訪問先からのリクエストに対する準備、日本文化紹介について参加者同士で打ち合わせを行った。

訪問団一行は**7**月**12**日、成田国際空港から出発し、同日昼頃に仁川国際空港に到着した。到着後、昼食をとりソウルに移動し、世宗ホテルにて韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）による今回の訪問に関するオリエンテーションが実施された。また、韓国の教育講義や、韓国のESD・地球市民教育（GCED）およびASPNet（ユネスコスクール）についての説明があり、日本教職員は韓国の教育事情や日本の教育事情との違いについて理解を深めた。その後、同ホテルにて歓迎晩餐会が開催された。晩餐会では、**2016**年の**2**月に日本政府による招へい事業を通して訪日した訪問団長からのあいさつもあり、参加者も多く和やかな場となった。

翌日、A グループは、ソウル市内のユネスコスクールである泳熏（ヨンフン）国際中学校を、B グループは、同じくユネスコスクールの鹽光（ヨムグァン）中学校を訪問し、学校給食も体験した。

14日から**16**日までの**3**日間はA、B 二つのグループに分かれ、A グループは慶尚北道（キョンサンブクト）安東（アンドン）市を、B グループは、仁川（インチヨン）広域市を訪問し、各都市で教育機関・学校訪問や文化施設見学を行った。

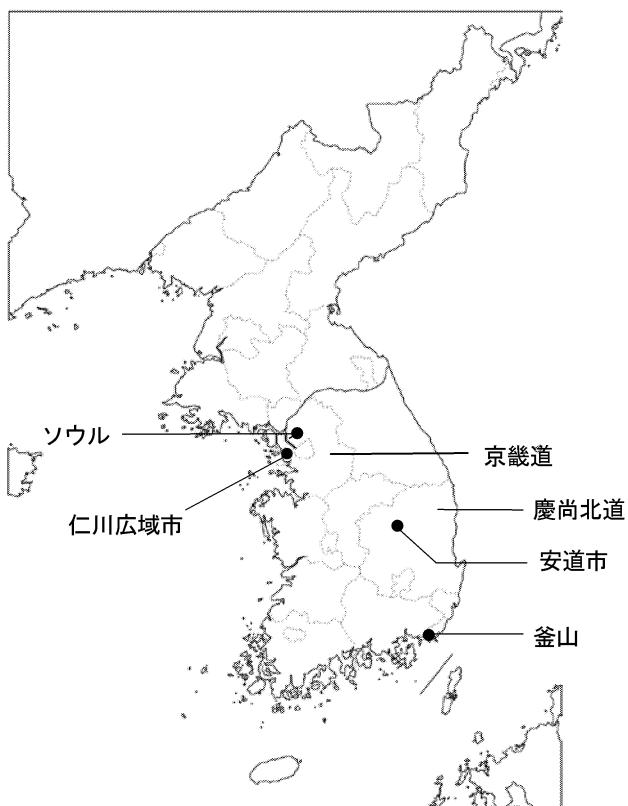
14日、A グループは慶尚北道教育庁を表敬訪問した。夕方からは歓迎晩餐会が行われ、慶尚北道教育庁の歓迎を受けた。**15**日はユネスコスクールでの吉州（キルジュ）小学校を訪問し、午後は同じくユネスコスクールである安東永明（アンドンヨンミョン）学校を訪問した。その後プログラム評価会を行った。**16**日は午前中に芙蓉臺（プヨンデ）と屏山（ピョンサン）書院、午後は安東河回村（アンドンハフェマウル）を見学した。同日夕方、ホームビジットがありホストファミリーと交流の時間を持った。

14日、B グループは仁川広域市教育庁訪問後、ユネ

スコスクールである彌鄒忽（ミチュホル）外国語高校を訪問した。夕方からは歓迎晩餐会が行われ、仁川広域市教育庁の歓迎を受けた。15日は午前中にユネスコスクールである仁川陽川（インチョンヤンチョン）中学校を訪問し、午後は同じくユネスコスクールである仁川萬壽（インチョンマンス）高校を訪問し、同校を会場に教育交流会を行った。16日の午前は延壽（ヨンス）図書館を訪問した後に月尾（ウォルミ）公園を見学し、午後は訪問団によるプログラム評価会が行われ、様々な意見を交わした。同日の夕方からはホームビジットが行われ、ホストファミリーと有意義な時間を過ごした。

17日、A、B両グループ共に釜山へと移動した。同日の宿泊先であるイビスアンバサダー釜山に到着後、同ホテルにて報告会及び閉会式が行われた。

7月18日、一行は帰港先ごとに成田国際空港、関西国際空港、福岡空港に向け、帰国の途に着いた。



2. 教育関連機関

韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)
慶尚北道教育庁
仁川広域市教育庁

今回の教育機関訪問は、韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)、慶尚北道(キョンサンプクト)教育庁、仁川(インチョン)広域市教育庁の計 3 機関で行われた。

韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)

7月 12 日

代表: 閔東石(ミン・ドンソク)

ソウルに到着した訪問団は、宿泊先である世宗ホテルにて韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)によるオリエンテーションを受けた。オリエンテーション終了後、韓国教育開発院グローバル教育開発協力研究室長の尹鐘赫(ウン・ジョンヒョク)氏より「韓国の教育政策」と題した講義を受けた。また、KNCU 政策事業本部教育チームの徐賢淑(ソ・ヒョンスク)チーム長より韓国の持続可能な開発のための教育(ESD)・地球市民教育(GCED)およびユネスコスクール(ASPnet)についての説明を聞き、理解を深めた。講義終了後は歓迎晩餐会が行われた。

〈韓国の教育に関する講義〉

講義では、4 点のトピックを挙げて韓国の教育についての説明があった。

1 点目は、韓国で目指している人材は、「人性、知識、核心力量を兼ね備え、新しくて価値のあるアイデアや産出物を作り出す能力を持つ者」ということであった。若手の教育に力を入れており、日本のゆとり教育と似ている部分もある。

2 点目として、韓国教育革新の最新の動向についての説明があった。以前は、教育課程の自律性と柔軟性の強化を掲げていたが、改正された教育課程では、進路教育と社会的な要求の反映を強化しているということであった。

大学入試に関しては、単なる知の識量ではなく、社会情緒力量と人性を強調した知識を反映した入試にしたいと考えていて、教育の量を減らす方向に動いているとのことだった。転んだとしても再び起き上がるような、いわば根性をはぐくむ教育、多様化を目指して、自分の人生を開拓できる教育、食育、マナーなど重要視するということであった。

3 点目として、グローバル創意人材育成戦略として、自由学期制と大学入試自律化政策に関する説明があった。自由学期制については、今年度から韓国のですべての中学校で、3 年のうち、1 学期間を自由学期とする制度が始まった。それぞれの適性と素質に合わせた進路探索のきっかけ作りとなっており、政府の保守・革新どちらの派閥もこの制度を支持している。

また、4 点目の大学入試自律化政策に関しては、点数を中心とした機械的な既存の選抜方式から選抜要綱の多様化・特性化を目指した方向に進んでいくという話があった。

最後に、創意人材を育成するための 4 つの課題を挙げた。①安全で幸せな毎日を追求できる学校教育制度の構築、②すべての児童生徒に向けた開放的な創意教育の具現化、③集団的創意性と知性を強調する、共同体を中心とした教育制体系の構築、④創意性の具現化プロセスにおける挑戦、失敗に寛容な社会風土の造成 である。

この 4 点を大きな課題だとし、2015 年に仁川で世界教育フォーラムが行われたことに触れながら、「持続可能な未来社会の発展のため、グローバル社会を先導する創意人材の育成と教育革新の追及」という共通の目標を持ちつつ、それぞれ倫理面の教育、持続可能な発展という点を強調している GCED と ESD の重要性について語り、講義を締めくくった。



ウン・ジョンヒョク氏による講義

(世宗ホテル ライラックホール)

<韓国のユネスコ活動及びユネスコスクールの紹介>

韓国におけるユネスコスクールのネットワークは4校から始まった。その目的は良質的な教育をすることであり、近年は校数が増え、国際協力により力を入れる傾向がある。

2015年に仁川で世界教育フォーラムが開かれ、2030年までにすべての人に対する包括的、公正かつ良質な教育を確保し、生涯学習の機会を促進することを目指した「仁川宣言」が採択された。

韓国におけるユネスコスクール加盟のステップは、国内ネットワーク、国際ネットワークという2段階に分かれている。2年ごとに評価を行い、活動が少ない学校をネットワークから除名するというシステムがある。

ユネスコスクールのネットワーク活性化の重点方針は、ユネスコの理念を教育課程に反映させること、海外のユネスコスクールとの国際交流の拡大、ESDおよびGCEDの実践である。

ユネスコスクールの活動は学校全体をあげて行うが、正規のカリキュラムに入れることは難しい。教育課程へは反映をしており、現在は学校全体で取り組むユネスコスクールの運営モデルを検討している段階である。

終わりに、ユネスコスクールの活動に10年間関わった先生のメッセージ(教師は生徒と一緒に学び、探求、成長する。知識の伝達者よりは促進する存在である、など)が紹介された。

(千葉県立桜が丘特別支援学校 教諭 三橋徹)



KNCU ソ・ヒョンスク教育チーム長による説明

(世宗ホテル ライラックホール)

<歓迎晩餐会>

講義終了後、休憩をはさみ、KNCUのソ・ヒョンスク教育チーム長の司会のもと、歓迎晩餐会が開かれた。参加者が紹介され、KNCU事務局長の閔東石(ミン・

ソンソク)氏のあいさつから開会式が始まった。あいさつでは、日韓国交正常化50年を迎えて、教育における韓国と日本の交流と協力がさらに強固なものになることを願っているという話があった。次に、韓国教育部国際教育協力担当官のキム・チョンホン氏、在大韓民国日本大使館一等書記官の篠田智志氏のあいさつがあった。最後に、訪問団長の金澤裕司氏から、人と人との繋がりが大切であるという話があった。

次に記念品交換および贈呈が行われた。韓国教育部と日本の文部科学省および国際連合大学との間で、KNCUとACCUの間でそれぞれ記念品交換が行われた。また、KNCUから訪問団への記念品贈呈も行われた。

その後、KNCU 人文社会科学文化委員会副委員長のパク・フンスン氏、国際連合大学サステイナビリティ高等研究所事務局長の古田知美氏の乾杯の挨拶で会食が始まった。

会食では、テーブルごとに日韓双方の教育の情報交換が活発に行われた。英語教育の現状や自由学期制の導入についてなど、韓国教職員による現場の詳しい話を聞くことができ、大変有意義な時間となつた。

最後に、日韓の教職員が歌を披露し合った。日本教職員は『ふるさと』(日本語)、『小さな世界』(1日本語、2英語、3韓国語)、韓国教職員は『あなたは愛されるために生まれた人』を歌った。そして、記念撮影をし、閉会となつた。

翌日からの教育機関訪問がさらに楽しみになる、また、韓国の方からの「おもてなし」を感じる歓迎晩餐会であった。

(千葉県八千代市立萱田小学校 教諭 野田裕行)



記念品の交換を行う韓国教育部国際教育協力担当官キム・チョンホン氏と国際連合大学サステイナビリティ高等研究所事務局長の古田知美氏(世宗ホテル 世宗ホール)

【参加者の感想】

野田裕行…拙い英語を使いながら、韓国の先生方と直接話ができるて大変有意義な時間であった。

韓国では、ネイティブのような英語が話せる教員を育成する支援を行い(海外留学・派遣)、英語教育の充実を図っていた。韓国の英語教育が、日本よりも進んでいることを実感するとともに、英語教育の必要性をさらに実感した。また、講義でも話題に上がった自由学期制についても、詳しく話を聞けた。自分の適性や将来、これから勉強する意義について考えるという点において、日本のキャリア教育(総合的な学習の時間)と似ているのだが、中学 1 年の 2 学期から大幅な時間をとるという点においては異なっていた。韓国の子どもたちの主体性を伸ばそうとする教育改革の流れを実感した。しかし、日本と同様に、実施に当たり、子どもたち一人ひとりの実態に対応することが困難であるということも知ることができた。

日韓両国の教育との相違点に気付くとともに、その根底に流れる両国の文化の確かな違いを感じることができた。

キョンサンブクト
慶尚北道 教育庁
(A グループ)

7月 14 日

代表者名：李英雨（イ・ヨンウ）

特色： 教育指標を「学びが楽しくて分かち合いが幸せな人材育成」とし、政策の方向を 4 点示している。①生徒が夢を育てる教室、②教職員が造り甲斐を感じる教壇、③PTA が満足する学校、④皆が感動する教育である。特色ある事業としては、「教師、競争、結果、教科書、講義」中心から、「生徒、協同、過程、生活経験、議論（体験）」を中心の授業を定着させようとしている。さらには、夢を育て、才能を高めるための生徒の活動を中心としたクラブ文化を創出することを目指すとともに、国際交流事業にも力を入れている。

はじめに、慶尚北道教育庁の職員紹介が行われ、教育長、奨学官、企画調整官、その他職員の方々が紹介された。続いて、金澤団長をはじめとする訪問団が紹介された。

あいさつでは、教育長のイ・ヨンウ氏から、歓迎の意と、本交流の意義及び慶尚北道の特徴についてお話をいただいた。

続いて、訪問団の金澤団長から、受け入れに対する感謝の意、安東（アンドン）の歴史的な背景、文化交流の意義についての内容を盛り込んであいさつを行った。続いて、記念品交換が行われた。

慶尚北道教育庁の概要についての説明は、配布されたリーフレットをもとに行われた。慶尚北道の教育指標は、「学びが楽しくて分かち合いが幸せな人材育成」という内容であった。さらに、慶尚北道教育庁の日本語版の PR 動画を視聴した。動画視聴後、質疑応答が行われた。

〈日本側からの質問〉

Q: 自由学期制をはじめとして、創造性を育む教育に取り組まれていることに共感する。このような新しい教育を各学校に浸透させていくために、例えば校長やリーダーとなる先生にどのような精神・内容・方法を伝えているのか、具体的に教えていただきたい。

(A-13 大場一輝)

A: 韓国政府で最も関心をもち力を入れているのが自由学期制である。学年の 9 月から 2 月まで実施する。従来の授業からの改善点は以下の 3 点である。

①教授方法

講義形式の授業から、教師が生徒と一緒に参加する参加型の授業を目指している。活動中心授業と呼んでいる。そのような授業ができるように、研修を行い、支援している。

②指導内容

芸術、体育等を重視している。最も我々が喜んでいるのが、生徒たちが歌って踊って運動をすることである。1 人 1 楽器、1 人 1 スポーツ、1 人 1 部活を推進している。

③体験活動の重視

早期から自身の進路を探究している。400 近くの機関と MOU を締結して進めている。

自由学期制の目標は楽しい学校生活を行うことで、「夢と才能を育てる教育活動」につなげることである。

Q: 小学校における「楽しい取組み」には、どのようなものがあるのか。(A-12 野田裕行)

A: 中学校の自由学期制と同様の指導方法で、小学校でも授業を行うように伝えている。また、放課後の活動を強化している。これにより、すべての小学校が自

由学期制と同じように活動できると同時に、子供たちがやりたいことを選択して活動できるような場としての学校になっている。

続いて、事前に日本側から質問があがった①小学生がICT機器を使った授業を受けているところ、②高校生が夜間に学習をしているところについて、写真による回答があがった。

小学校におけるICT機器を使った授業については、小学生は、1人1台ずつ持つて学習をしており、特にグループ活動に活用しているとのことであった。

高校生の夜間学習については、ほとんどの高等学校で大学受験に備えて、授業終了後、夜間に自律学習を行っているとのことであった。この後、閉会の言葉と写真撮影で終了した。



慶尚北道教育府のイ・ヨンウ教育長を囲んで
(慶尚北道教育府)

<地域歓迎歓餐会>

同日、安東グランドホテルにて、歓迎歓餐会が開かれた。大変広い会場で舞台が設置されており、慶尚北道教育府の皆様をはじめ、吉州(キルジュ)小学校、安東永明(アンドンヨンミョン)学校の先生方が出席してくださいました。晩さん会の冒頭には、安東女子高校と安東永明学校の生徒による歓迎の演技が行われ、軽快な音楽に乗って、元気なダンスが披露された。その後、吉州小学校の先生方による日本のアニメ主題歌を中心とした歌の披露があり、続いて、日本の教職員による歌を披露した。出し物の後は、用意された食べ物と飲み物をいただきながら、各テーブルのグループを中心に、約2時間交流を行って閉会した。

(東京都狛江市教育委員会 指導主事 坂本尚毅)



慶尚北道歓迎歓餐会で歌を披露する日本教職員
(安東グランドホテル)

【参加者の感想】

内田敦子…………人材こそが財産であるという考え方には日本に似ていると感じた。教員が研修を通して学び続けていることがわかったが、どのような内容の研修であるのか知りたかった。教員という職業が日本よりも大事にされている印象を受け、教員が誇りをもって教育活動に取り組んでいるのだと感じた。また、安東の精神文化を継承していくとする思いが熱く、学校教育においても大切なことを伝えている様子がわかった。各家庭においても具体的にどのような考え方を教えているのか知りたい。(教育府訪問)

今本雅隆…………韓国の教育施策は創意的体験活動や自由学期制、コミュニケーションを活用し人間制教育があるといったことを聞いた。韓国が大事にしようとしている教育とは何であるかを知ることができた。また、目標や方針を立てるとみんなで同じ方向に向かって短期間で取組む姿に感心した。国を挙げて子どもを大切にしているところは日本も韓国も同じであると感じた。(教育府訪問)

坂本尚毅…………児童・生徒による歓迎の演技を見ることができたこと、とりわけ地域の女子高と特別支援学校が交流している様子が見てとれたことについては、教員が主体のグループであるため、どの参加者も満足度が高かったと考えられる。(歓迎歓餐会)

インチョン
仁川 広域市教育庁
(B グループ)
7月 14 日

代表者名：李清淵（イ・チョンヨン）

特色：教育ビジョンを「皆が幸せな仁川教育」とし、共に生きる民主市民育成を目指している。4大主要施策(①安全で平和な学校 ②創意・共感教育で未来型の学力向上 ③皆に温かい教育福祉 ④公正で透明な教育行政)を、具体的に15の主要事業で推進している。その結果、学業中断生徒の減少、学校暴力通報の相談件数の減少、情緒行動面での高危険群生徒の減少、地域放課後学校の運用、首都圏主要10校の大学合格率アップ、貧困層の学費・給食費支援、特別支援学校生徒のパリスタカフェの開設、GCEDの活性化などの成果をあげている。

教育長のイ・チョンヨン氏から日本教職員一人ひとり握手をしての出迎え、歓迎を受け、その後、教育庁職員、日本教職員の紹介がそれぞれあった。その後、イ・チョンヨン教育長からの歓迎のあいさつがあり、その中で、仁川が国際港、国際空港のある国際都市として、ESDやGCEDを活発に行っていることや、仁川陽村（インチョンヤンジョン）中学校で行われる日本教職員の文化授業などを通して韓日両国の理解が深まるごとに期待など、お話をいただいた。続いて、訪問団副団長の根本明彦氏より、日本で活躍した韓国のサッカー選手チェ・ヨンス氏の話にふれながら、日韓両国の友好や、未来を担う子どもたちを育成していくために仁川で多くのことを学びたい旨の決意があいさつとして述べられた。あいさつの後、記念品の交換が行われ、仁川教育庁から鳳凰が描かれた漆塗りの額が、訪問団からは赤富士の屏風時計が贈られた。その後、教育長、副団長を中心に全員で記念写真の撮影を行った。

次に、教育革新課長のキム・ドンレ氏より教育の現況、教育の基本方向、4大主要政策及び重点事業、教育の成果についてプロジェクトを使っての説明があり、それに続いて質疑応答が行われた。

〈日本側からの質問〉

Q: 日本では幼・小・中・高の連携を教育委員会が中

心となって行っているが、仁川ではどのような連携を進めているか。

A: 進路教育について幼・小・中・高が連携を取れるように、小・中・特別支援学校は5つの教育支援庁、高校は本庁が支援している。

Q: 職業教育は、具体的にどのように行っているか。

A: 特性化高校、職業専門学校、マイスター高校、芸術学校などがある。職業訓練を行う学校では機械を操作できるように指導している。

Q: 公立学校と私立学校の比率はどうなっているか。また、私立学校への支援はどのようにしているか。

A: 仁川ではほとんどが公立であり、私立小学校 2%、私立中学校 5%である。私立学校への支援は人件費と目的事業への支援を行っている。

Q: GCEDは具体的にどのように行われているか。

A: 教育庁で、グローバル教育、GCEDの特区を設け、国際化の授業、教育課程が行われている。また脱北者が多い地域であるので人権教育、平和教育にも力を入れている。



日本教職員一人ひとり握手を交わすイ・チョンヨン教育長
(仁川広域市教育庁)

<地域歓迎晩餐会>

同日、松島セントラルパークホテル2階ルビーホールにて、仁川広域市教育庁主催の地域歓迎晩餐会が行われた。まず、受け入れ側である仁川教育庁、仁川の訪問校の関係者などの紹介があり、その後、日本訪問団の紹介が行われた。続いて、仁川教育庁教育局長パク・ユングク氏より仁川のユネスコスクールやESD、GCEDの紹介を含む歓迎のあいさつをいただいた。その後、根本副団長より仁川での訪問校への期待、国際連合大学サステイナビリティ高等研

究所の古田事務局長より友好関係を一層深めたいとの旨のあいさつが述べられた。

乾杯の後、彌鄒忽(ミチュホル)外国語高等学校の生徒による韓国伝統楽器テグムの演奏があり、日本訪問団からは『ふるさと』、『小さな世界』の歌の披露があった。晩餐会の中では、クイズなど楽しいコンテンツも用意されており、両国の理解、親睦を深めることができた。

(長野県教育委員会 主幹指導主事 佐倉俊)



歓迎晩餐会で伝統楽器の演奏を披露する生徒

(松島セントラルパークホテル)

【参加者の感想】

野村直美…………仁川広域教育庁が掲げる4大主要政策は非常に明確で、将来に向けて具体的なビジョンを描いており、説得力があった。地域と一体となって生徒を取り巻く教育支援体制を構築しており、その内容は低所得者層の生徒支援から世界市民のグローバル人材育成まで多岐にわたる。生徒の自己理解に関しては幼稚園・小学校・中学校・高校が連携して、それぞれの発達段階に応じた学習を行うが、その内容が最終的に高校の進路指導に集約するように心がけている。また、教育福祉に関しては、貧困家庭の教育費用の負担を軽減するだけでなく、健康面のサポートとして食事の差し入れを行ったり、図書を届けるサービスを行っていることで、本県も子供の貧困対策課を設置したばかりなので、このような施策はとても参考になった。(教育庁訪問)

梯泰三…………仁川教育庁では、徳島県と仁川の教育の比較ができました。安全な学校教育や学力伸張は、共通な教育政策だと思います。仁川には、脱北生徒の教育支援という地域の教育課題があります。本校にも地域としての教育課題があります。仁川教育庁訪問を通じて、仁川の教育現状を知ると共に、本県

や本校の教育を見つめ直す機会となりました。(教育庁訪問)

佐倉俊…………仁川広域教育庁指導主事の黄芝花(ファン・ジファ)先生には、初日の歓迎晩餐会の折から声を掛けていただき、仁川教育庁訪問、地域歓迎晩餐会はじめ仁川での学校訪問などすべてに直接関わっていただいた。この2月に長野県に訪問していただいたご縁もあり、友好関係を一層深めることができ、充実したプログラムとなった。(教育庁訪問、歓迎晩餐会)

3. 学校訪問

A グループ

泳熏国際中学校
吉州小学校
安東永明学校

B グループ

鹽光中学校
彌鄧忽外国语高等学校
仁川陽村中学校
仁川萬壽高等学校（教育交流会含む）

A グループと B グループに分かれ、学校訪問を行った。A グループはソウルと慶尚北道にて 3 校、B グループはソウルと仁川にて 4 校を訪問し、活発に授業見学や教職員、児童生徒との交流を行った。B グループが訪問した仁川萬壽高等学校では、学校見学後に教育交流会が実施され、日韓の教職員が教育についての意見を交わし、理解を深めた。

ヨンファン
泳熏 国際中学校 (A グループ)

7 月 13 日

代表者名：辛奇柱(シン・ギジュ)

特色：ソウル特別市の初代教育長であった故・金泳熏(キム・ヨンファン)学園長が 1965 年 4 月 21 日に学校法人「泳熏学院」を設立。2008 年 10 月 31 日に泳熏中学校が国際特性化中学校として指定された後、2009 年 3 月に泳熏国際中学校の第 1 期生が入学し、以後、国内の数少ない国際特性化中学校としてその力量を強化してきた。現在、以下の 6 つの項目を主要教育活動として展開している。**①厳しい人性教育、②先進化された国際教育課程、③英語イマージョン教育、④グローバルリーダー教育、⑤自己主導的な学習、⑥1 人 2 技活動**

学校到着後、教頭のシン・ギジュ氏より歓迎のあいさつと訪問団長の金澤裕司氏よりあいさつがあり、記念品交換を行った。シン・ギジュ教頭のご挨拶の中で、故キム・ヨンファン学園長により設立された学校であることや校

訓の「うそをつかず明るく協同精神を高めて健やかに」「教師と生徒は一体」といった学校の姿勢についてのお話があった。

続く学校紹介では、学校の概要として 1 学年 5 組で各クラス約 32 人、全校で 487 人の生徒と韓国人教師 22 人、ネイティブスピーカーの教師 15 人、講師 11 人、行政職員 12 人で構成されていることや国際中学校はソウルに 2 校しかないと、泳熏小学校・泳熏国際中学校はイマージョン教育と二重言語教育で韓国では最も有名であること、学校の目指す人間像は「全人的人間」であり、具体的には、①自我尊重感を持ち一緒に生きる暮らしを実践する社会人、②才能と自分の適性を開発し、幸せな夢を見る文化人、③国際的な観点と能力を兼ね備えた未来の専門人、④自ら学問を探求する姿勢を持った自主的姿勢人を目標にしている。

学校では先進的名門学校としての教育課程を運営し、「創意的自由を兼備し韓国人のアイデンティティを持つ国際的人材の育成」「主要 5 科目を英語で実施」「国際学科目の開設」「第 2 外国語強化」「創意力を伸長させる教育と多面的評価」を特徴とし、創造力・創意力・問題解決能力を高めるために、英語イマージョンプログラムの実施や自己主導的学習能力の育成をしている。またポートフォリオに 3 年間の活動を記録して管理しており、生徒の学びの過程の記録となっている。

その他、グローバル人材養成のための教育として、泳熏インターナシッププログラム(YIP)では保護者の中の専門家を招いて講演を聞く、アメリカや中国の大学と MOU を締結して国際交流をするプログラムを実施している。また 1 人 2 技の活動を行い、生徒一人一人がスポーツ 1 つと楽器を 1 つできるように教育している。さらに「正しい品格を育み、グローバルリーダーとして育てるには厳格な教育が必要」として厳しい人性教育を行い、グリーンマイレージ制度にて褒められることをしたらプラス点、悪いことは×点を与え、×が多くなると生徒は自治法廷で反省を促される。また無監督で試験を行い正直な人になれるための教育を実践している。校内の随所に本を置き、読書プログラムも多数用意して人文読書活動も行っている。

年間の学校生活では、夏休み冬休みの研究課題で優秀な作品には発表の機会が与えられる。また、ブックフェアでは古本のバザーを行って利益を寄付する等の活動を行う。1 年の自由学期・進路体験活動では大使館訪問をしたり外交官や各分野の専門家を招いた講演会、歴史文化体験等を実施して将来への目標を考える。その他国際交流、地球市民教育(GCED)、ユネスコ部活

動、礼儀作法の教育など多くの活動をしている。

続いて二手に分かれて校内の見学と授業参観をした。1年1組の道徳では道徳専任の先生がバラバラになつたカードを使いながらコミュニケーションの授業を行つていた。1年3組の科学の授業は少人数で映像を使いながらの温暖化についての授業を行つており、2年1組の数学では手元のホワイトボードを使いながら生徒同士が英語で話し合い、自分の考えを説明していた。3年3組の科学の授業は外国人の先生が担当していた。そのほか保健室、パソコンも備えた図書館、カウンセリングルーム、全員分の3年間のポートフォリオを保管している部屋なども見学した。保健室にはベッドが数台あり、保健教師が応急処置や保健教育など日本とほぼ同様の活動を行つているようだつた。

昼食時には落ち着いたカフェテリアの教職員用スペースで、生徒と同じメニューの給食をいただいた。全員がこの場所で食事をするとのことだった。

午後には先生方との懇談会があり、意見交換をした。

<日本側からの質問>

Q:高度な教育内容だが研修はどのようにしているのか？(A-06 糟谷明洋)

A:個別研修を年60時間以上実施。一般的な研修もある。先生方の教科別の集まりもある。

Q:入学後どれくらいで流暢な英語を話せるようになるのか？(A-10 森本朝子)

A:国際中学校であり、5科目を英語で実施することをPRしているので英語ができる生徒が入学してくる。1年次は週2回10段階に分かれて放課後に英語の授業を受けるので必ず上達する。ついていけない生徒は別に授業を行つたり、上位10%は夏休み・冬休みにTOEFLの授業をする。

Q:インターンシップ(YIP)サマースクールはどのようなことをするのか？(A-08 三橋徹)

A:先生が提供する授業を提示し、オンラインで生徒が選択して参加する。読書キャンプや体験に焦点を合わせた活動を行う。

Q:生徒の好きな教科は？(A-04 本田将貴)

A:体育が一番好き。週に3時間ある。金曜の午後には専門の講師がきて1つの種目について指導する。

Q:国際的に活躍できる人を育てるには自国のことによく

知っていることも必要だが、そのあたりの工夫は？

(A-15 坂本尚毅)

A:国社英数科学以外はすべて韓国語で行い、二年次の社会では主に歴史を学ぶ。またサマースクールで文法や歴史・文化遺産について触れている。

続いてユネスコクラブと生徒会の生徒との懇談会があり、生徒の自己紹介のあと懇談があつた。

<日本側からの質問>

Q:自分のためになっている活動は何か？

(A-02 阿部紀子)

A:教育文化を探求し文化遺産を学ぶ名人プロジェクト。体験が勉強になる。

A:世界の人とペンパルになり、礼儀作法や文化を学べる機会になった。

Q:夢は何か？(A-12 野田裕行)

A(複数の生徒):弁理士—YIPで話を聞いてなりたいと思った。／先生一ボランティアで英語の本を読んであげて知識を分け合う楽しみを感じた。／外交官になって韓国のことを見たい。／ユネスコで働いて遺産を守りたい。／国際機関で働いて環境や動物を守りたい。／獣医師になりたい。／心理相談士になりたい。／両国が親しくやっていけるよう外交官になりたい。／物理学者になって物質の始まりを研究したい。

懇談後、玄関前にて記念撮影をして訪問を終了した。

(東京都多摩市立東愛宕中学校 主任養護教諭 小林淨子)



ユネスコクラブと生徒会所属の生徒との交流の場
(泳熏国際中学校)

【参加者の感想】

阿部紀子…………国際教育、国際理解教育を大切に、国際的人材を育てるためのプログラムに圧倒された。ネイティブの教師と、韓国人教師の TT で学級担任を行っていることにも英語教育への指導の充実を感じられた。生徒たちも自分に課せられた課題や、環境をしっかりと受けとめ、「自分自身の未来」見据えて、おそらく大変なであろう学業に打ち込んでいる姿が見られた。

私自身としては、「一人二技」が印象的に残った。慶尚北道教育庁でもお話をあったことだが、技能系教科をおろそかにしないことは、人生に色を添えていく素敵なことではないかと感じた。その反面、どの程度のレベルを求め、どの程度の技能を指導しているのか、限られた時間の中でどのように取り組んでいるのかを知ることができなかつたため、疑問が残った。

交流会で生徒が話してくれた「将来の夢」について、日本の先生方の中では色々な考え方があるとは思うが、私は自分の身の回りや、地域、国、社会のことにつかまじめ目を向け、自分の将来について考えていることについて、素晴らしいことだと感じた。例え、それが叶わない夢であったり、将来全く違う職業に就いたりしたとしても、今の自分に何ができるか、何をすべきかを考える指針となっていることは間違いないので、ぜひその夢に向かって進んでいって欲しいと思う。

糟谷明洋…………グローバル人材の養成を目指し先進的な国際教育を行っていた。特に印象に残った点は 3 つある。

① イマージョン教育

生徒が英語に没頭している姿が印象に残った。参観した道徳、数学、科学の授業はすべて英語で行っていた。すべての教科で授業の半分は英語で行っているとのことで、また、生徒もきちんと英語で応対しておりすばらしかった。英語が苦手な子どもには放課後に指導しているとのこと個への対応もできていると感じた。

② 学校施設・教育環境

生徒一人一人のポートフォリオを作り、1 室にまとめて管理していることに驚いた。生徒を学習指導の積み重ねができていた。図書室は、コンピューター室と一緒にあった。英語による数学の教科書等、授業で使う図書が人数分揃っており、英語に親しむにはすばらしい環境を感じた。また、外国语を指導する外国人教師が多く在籍しており、人的な面でも充実していた。

③ 教職員・生徒との懇談会

このような先進的な授業をするために、公的研修を年間 50 回以上参加する他、教科ごとにグループを作つて

研修もしているとのことだった。また、少人数のグループ分けでは等質にしていたり、英語が苦手な生徒のための補修を行っていたり、個別配慮していると感じた。生徒との懇談会では、ユネスコ部と生徒会のメンバーと対面した。日本人の秩序だった態度の育成に質問したり、自分の夢を堂々と話したりする姿が印象的だった。学校のカリキュラムのよさを生徒も感じていたが、一方、提出物等の課題も多くたいへんと話していた。

キルギュ 吉州 小学校 (A グループ)

7月 15 日

代表者名: 張國洙(チャン・グクス)

特色: 1995 年開校。児童数 756 名、29 学級(うち特別支援学級 1)、職員数 55 名である。66 名 3 学級の幼稚園が併設されている。2015 年にユネスコスクールに加盟、2016 年にユネスコクラブを設立し、21 名で活動している。「生徒には夢がある・教師にはプライドがある・保護者には感動がある」という学校経営方針の下、「韓国精神文化の首都」と言われる安東の学校として伝統文化を受け継ぎ、夢・才能・創意にあふれる人材育成を目指している。

歓迎式の会場である講堂に入ると、たくさんの児童が日韓の小旗を振って歓声を上げて出迎えてくれた。校長のチャン・グクス氏、金澤團長の挨拶のあと、歓迎の公演が行われた。まず、クラブの児童による重要無形文化財に指定されている河回仮面劇、続いて合唱団員 50 名による日本の『四季の歌』の合唱、最後に 1 年生による小鼓舞が披露された。次に、学校紹介として、吉州小学校の教育目標や現況がスライドで説明された。さまざまなクラブ活動があり多彩な才能を引き出そうとしていることや、ユネスコスクールだけでなく「7560 先導学校」や学校進路教育協力学校などにも選定されていることが分かった。

授業参観は全教室を自由に見せていただいた。どのクラスも子どもたちが落ち着いて授業に参加しており、先生の指示や発問に素直に反応していた。

続いて文化交流授業が 12 学級で実施された。日本の教員が韓国の児童に向けて、折り紙・こま・福笑いなどの遊びや、弁当・寿司などの食文化、祭りや踊りといった地域の伝統文化について紹介をした。新しく来たばかりの先生に対しても進んで働きかけて行こうとする姿勢が

感じられ、1年生でも立ち歩きなどせず理解力も高かつた。

給食は、ランチルームで学年ごとに時間差をつけて食べるようになっていた。栄養士が、私たちの健康を気遣って参鶏湯を特別に振る舞っていただいたことにも「おもてなし」の心を感じた。

懇談会では日本の教職員から次のような質問があがつた。

<日本側からの質問>

Q:教員の相互協調体制が確立されているということだが、実現に向けてどんな努力をされているか。

(A-13 大場一輝)

A:個々の特性を生かせるよう、民主的な学校運営を心がけている。教育庁でも「先生クラブ(記録者注:自主的な研究分科会といったものと思われる)」の取り組みを進めしており、本校にも3~4つのクラブがある。月2~4回の会議をもち、授業の方法を研究するなどの話し合いをしている。

Q:教育目標に掲げられている基本生活習慣は具体的にはどのようなものか。また、室内での履物が上履きとサンダルの2種類あるが、どのように使い分けているのか。

(A-07 小林淨子)

A:一番は礼儀作法である。挨拶、食事のマナー、友たちとの間での礼儀(仲良く過ごす)といった内容である。上履きとサンダルの使い分けには特にきまりはなく、動くのに無理のない範囲であれば個々の子どもに自由に決めさせている。

Q:ユネスコクラブはどのような活動をしているか。

(A-10 森本朝子)

A:文化遺産を保護するため、書院に行って清掃活動を行っている。また、農場に行ってエコ野菜の栽培体験を行った。今年始まつばかりなので、まだまだ十分とは言えないが、今後さらに充実させていきたい。

Q:担任が全ての授業を担当しているように見受けられたが、得手不得手もあると思うので、教科ごとに交換授業を行うなどの対応をすることはあるか。

(A-02 阿部紀子)

A:体育・音楽・美術などについて専任の先生を置いている。本校には6名いる。規模が小さいといいこともある。また、英語と体育には補助の講師がつく。

Q:基礎体力が十分でないという課題があるようだが、どのような取り組みで育てていこうとしているか。

(A-04 本田将貴)

A:昨年から「7560先導学校」に選定されている。7560とは、一週間7日のうち、5日は60分間運動するという取り組みである。走ったり縄跳びをしたりボール運動をしたりしている。

Q:研修の進め方をどのように工夫し、時間をどのように確保しているか。(A-22 梅澤一久)

A:先生方の士気が高まるように内容を設定し、自主的に研修を進められるような制度がある。オンラインで研修が受けられたり、研修院という施設で研修が受けられたりするようになっている。また、校内で若手を集めて主席教員が指導することもある。年間120時間(主席は90時間)の研修が義務付けられている。

Q:特別支援学級への就学はどのようになっているか。

(A-19 鈴木文哉)

A:教育支援庁に特別支援教育センターがあり、保護者の同意に基づいて特別支援教育委員会で就学の判定を行う。教員の判断ではない。程度によっては特別支援学校に就学することもある。

Q:教科の成績の高さは放課後の取り組みの成果による部分もあると思うが、授業の中で学力を上げるためにどのような工夫をしているか。

(A-06 糟谷明洋)

A:以前はどう教えるかという教授法が強調されていたが、今は教員が児童をどう学習に向かわせられるかということに焦点が当たれている。話を聞くだけでは記憶への定着率が低いと言われている。討論や教え合いといった子どもたちが活動する授業になるよう変化している。

(東京都狛江市立狛江第五小学校

主任教諭 竹谷正明)



日本教職員の勤務校と生中継授業を行う様子
(吉州小学校)

【参加者の感想】

小林淨子…………窓からのぞく子どもたちの笑顔に迎えられた吉州小学校は、校内のあちらこちらに日本語の表示や歓迎の言葉があり、渡された資料もすべて日本語で、机上の名札からお茶菓子に至るまで細やかな心遣いであふれていた。

生徒の夢、教師のプライド、保護者の感動をキーワードにした「幸せな学校つくり」を目指した学校経営と学校の実態分析から様々なプログラムを運営し、特に歓迎会で見せてくれた合唱や小鼓舞、河回仮面劇など、「安東は精神文化の首都」の言葉通り、伝統文化を大切にしていることが伝わってきた。また校舎内には安東の食文化や農産物、エコなどについての作品や掲示が多数あり、地域の良さを自覚できる子どもを育てようとする姿勢が見て取れた。

授業参観や文化授業では、子どもたちは落ち着いていて日本語で挨拶をしてくれたり自然にやり取りができ、特に文化授業では筆をもった子どもたちがわくわくしながら自分の名前を書いたり、墨で真っ黒になった手を何とかしてほしいと言ってくる様子は日本の小学生と同じで、無邪気でかわいかった。

ユネスコスクールとして地域交流や国際交流などを行って文化遺産の清掃なども行っているとのことだったが、自国の文化を守り発信するという活動を行うと同時に初めての外国人でもこだわりなく自然に接することができる子どもたちに感動した。

森本朝子…………吉州小学校では、1年生に対して文化交流授業を行いました。日本の挨拶や文化の紹介クイズを行った後、習字体験をしました。子どもたちは、とても無邪気でした。習字にとても興味をもったようで、夢中になって書いていました。人が好きで、どんどん話しかける姿は、日本の子どもたちと変わらないと思いました。

校内を見て回ったときは、安東の食文化や踊り等の伝統を大切にしていることが分かりました。子どもたちが河回踊りをしていたり、地元の食材についての掲示物があつたりと地域に根差した学校作りを行っていると思いました。これこそ持続可能な社会を作る教育だと思います。

アンドンヨンミョン 安東永明学校（A グループ）

7月15日

代表者名：裴榮哲（ペ・ヨンチョル）

特色：開校して44年間、重度・重複知的障がいを持っている障がい児の自立のための献身、努力している特別支援教育専門の教育機関である。「ときめき教育」永明教育を通じて、PTA、教職員、地域社会住民の胸をときめかせ、わくわくさせる学校経営として、次の4つの柱を掲げている。**①実践中心の人性教育強化、②基礎、基本を固める教育課程の運営、③現場中心の職業進路教育強化、④共に参加する学校経営の実践**

安東永明学校に到着すると、校庭のプールで楽しく水遊びをしている元気な子どもたちが目に飛び込んできた。そして、児童生徒職員によるあたたかい歓迎を受けた。まず、学校内施設の見学をさせていただいた。学校を入ってすぐにカフェがあり、コーヒーのいい香りが広がっていた。ここは一般の方の利用も可能であり、生徒たちが働く場にもなっている。教室では放課後学校で学習をする子どもたちの姿があった。学級園では無農薬野菜を作り、食べるのだという。日本の学校と同じ一面を見ることができた。今回、一番驚いたのは敷地内に職業施設があることだ。ここには、クリーニング施設・機密文書の処理施設・バリスタ練習・封筒作り・クリーニングしたものを畳む等の場所が用意されており、実際に働いている生徒もいる。特にバリスタ練習は生徒たちに人気があり、練習で作ったラテアートを実際にいただくことができ、心あたたまるひとときになった。その他に、水耕栽培の施設があつたり、ゲストハウスと呼ばれる一人暮らしや家族と泊まる練習ができる施設を見学した。

続いての歓迎会では、冷たい飲み物やお茶菓子・果物等のおもてなしを受けながら、生徒8名によるテコンドーの発表、学校広報映像の視聴、校長のペ・ヨンチョル氏のあいさつ、金澤団長の答礼、記念品交換、生徒代表のあいさつなどが行われた。テコンドーの発表は、事前リハーサルを体育館で行っており、気合いの入った内

容に拍手喝采であった。次に、学校からの説明では、『永明 is UNESCO』と題し、グローバルな視野を持つこととして、①地球的支援、②持続可能な開発のための教育(ESD)、③人権・平和④韓国精神文化の首都、④安東を学ぼうの4点を紹介していた。「近くで近い国・日本、細くて長い5年間の出会い・UNESCO」とまとめたのが印象的であった。続いての懇談会では、質疑応答が行われた。

<日本側からの質問>

Q: 教育課程や時間割はどうなっているのか。

(A-08 三橋徹)

A: 日本の学校と似ている。国語算数等の教科と職業に関するに入れています。

Q: 特別支援学校でも自由学期制を実施しているのか。

(A-08 三橋徹)

A: 特別支援学校に関しては2年の猶予期間があるが、創意的な能力を高めることや体験を強化する活動は今から少しずつ始めている。2年後には実施される予定。(特別支援学校の場合、2017年までに50%まで、2018年には全面的に適用される。)

Q: 高校卒業後の就職先について、状況を教えてほしい。

(A-08 三橋徹)

A: 高校を卒業して2年の専科課程がある。障害を持っている人の就職は難しい。その解決策のひとつとして学校企業がある。その目的は現場の企業と同じ環境を作つて、生徒たちが体験できるようにしている。つまり、学校企業で実習しているということである。就職が難しいので、学校の中の学校企業で実習させて、社会に出やすいようしている。一番いい就職の訓練は、生徒を学校の中にだけ置いておらずに、2年間外部の企業に預けて訓練をさせることである。それによって就職しやすくなる。例えばカフェに就職させて実技を学ばせるとか、生徒たちのレベルに合わせて送っているので、生徒たちは実習をしているうちに必ず就職できる。この学校で30%くらい就職している。一般的な青年も就職が難しい。見学していただけたように、職業リハビリ施設がある。そこに就職する場合もあれば、学校企業に就職する人もいる。韓国政府でやっている政策だが、障害者雇用奨励金制度というものがある。企業で障害者を何%雇用すると、それに合わせて支援金をもらえる。そこで障害者をもっと雇用しようとする企業が出てくるので、それが力になってい

る。逆に、障害者を採用しなかったら、雇用負担金という一種の罰金が課せられる。そのため、企業では障害者をなるべく採用しようとしている。

Q: 医療ケアについて、医療行為を学校の先生がどこまで行ってよいのか。

(A-08 三橋徹)

A: 一般的な外傷処置や投薬まで可能。症状がひどくなつた場合、寮に住んでいる生徒の場合は保健の先生が病院に連れていくが、通学している生徒の場合は基本的に保護者が病院に連れて行く。ただし、急な場合は保健の先生が連れて行く。骨折が疑われる場合には、病院でレントゲンを撮ってもらう。縫合も保健室ではできないので、病院に連れて行く。一般的の薬は投与可能だが、専門の薬の場合、処方箋が必要なので病院で処方箋をもらう。呼吸器に関しては酸素を与える生徒はいない。呼吸が困難な生徒には酸素を測定して、簡単な酸素の投与は保健室ができる。てんかんの患者の場合、保健室で簡単な手当や処置はできる。

Q: 安東市の一般学校と交流はしているか。

(A-15 坂本尚毅)

A: 交流は学校長の裁量によってやっている。この学校の場合、近くの小学校と中学校、2校と姉妹校のように交流している。

Q: 交流をした成果について、教えてほしい。

(A-15 坂本尚毅)

A: 非障害者が障害者を見る目が変わった。これは一般的の生徒にとって人性教育の一環となっている。なので、障害者と一緒に生きていくべき同僚であり友達である。パートナーシップや絆が強化された。

懇談会の後、全員で記念撮影を行つた。帰校時にも生徒たちの心からの笑顔とあいさつで見送りがあり、金澤団長の「特別支援学校は教育の原点である」という言葉を胸に刻みながら、学校訪問を終了した。

(長野県山ノ内町立東小学校 教諭 青木宣廣)



バリスタ練習で生徒が実際に作ったラテアートをいただく様子
(安東永明学校)

【参加者の感想】

菅谷万紀…………訪韓前より韓国の特別支援教育に大変興味をもっていたので、訪問を大変楽しみにしていた。ハード面や人事など大変手厚い対応をしていることや、幼稚園から専攻科まで全人的に子どもたちと向き合う姿に感動した。また、学校の中に寮や学校企業があることが日本とは異なる部分であり、それに関しても力の入れ具合を感じるものであった。

竹谷正明…………知的障害のある子「でも」ではなく、知的障害がある「からこそ」GCED や ESD が必要であるという視点に感銘を受けた。また、学校と企業とが連携して校内に作業施設を作り、卒業後より確実な就労につなげている取り組みは日本の公立学校にも何とかして取り入れられないだろうかと思うぐらい魅力的であった。

ヨムグァン 鹽光 中学校 (B グループ)

7月13日

代表者名:李炳坤(イ・ビョンゴン)

特色:私立の共学校であり、1965 年にキム・ジョンリヨル博士により設立された。同じ敷地内に鹽光メディテック高校、鹽光高等学校、鹽光幼稚園がある。キリスト教教育を通じて、善良かつ有能な人材を育成することを校訓としている。校名である鹽光(ヨムグアン)のヨムとは塩を表し、グアンは光を表している。この塩と光はキリスト教(聖書)に由来するものである。学校の 4 大ビジョンとして、①キリスト教育、②ビジョン教育、③秀越性教育、④グローバル教育がある。同校は、ソウル型自由学期運営優秀校に選ばれている。また、優秀活動クラブコンテストで最優秀賞を受賞している。

私たちが到着すると、玄関ロビーで吹奏楽の演奏で迎えてくれた。その後、視聴覚室に入り、生徒公演として、ダンスを披露してくれた。校長のイ・ビョンゴン氏よりあいさつがあり、その中で、学校の特色としてキリスト教を通して、善良かつ有能な人材の育成を目指し、ユネスコと協力し取り組んでいるとのお話しがあった。その後、鹽光 50 周年記念映像を視聴し、鹽光 4 大ビジョンの映像を視聴した。そして、学校で取り組んでいる GCED の活動紹介があった。内容については、①World Vision Association～仲間たちと協力しながら生きるために必要なことを学ぶ～、②UNESCO CCAP～ユネスコの CCAP プログラムに基づき、国際文化理解を深める。具体的には、外国の先生を招待して、その国の文化を学ぶ、③Education in the classroom～各教科の授業時間に学んでいる GCED、④Club Activities～生徒クラブ(アフリカに運動靴を送るなど救済活動などを行っている)／教師クラブ(GCED のために指導案を作成)である。

次に校内や敷地を見学した。敷地内には、鹽光学院の設立精神である善良で有能な人を表すヨム=塩、グアン=光の文字が彫られた石碑が立っていた。校庭では、生徒たちが元気よく体育をしていた。高校の校舎に入ると、高校生が聖歌を一生懸命に練習しており、歌声が響いていた。また、高校のブラスバンドは、韓国でもトップのレベルとのことであった。同じ敷地の中に、外国语高等学校もあった。その高校は韓国語を母語としない生徒も集まるため、いろいろな生徒が通っているそうである。中学校の校舎内では、理科室や体育の授業を見学した。廊下には、学校の規則や紹介など様々なものがきれいに掲示されていた。また、ボランティア活動をしたときの記録など生徒が書いた作文などが掲示されていた。

一通り見学を終え、図書室で懇談会を行った。

<日本側からの質問>

Q: 先ほど、フィリピンの伝統文化の踊りの授業を参観したがその授業はサークル活動なのか授業の一貫なのか教えて欲しい。また、他の国の踊りもやっているのか。
(B-11 中村弘子)

A: 本校は、私立高校なので中学校で体育の授業として行っている。1 学期に 17 時間、1 年で 34 時間行っている。今日、見もらったフィリピンの舞踊は、1 学期に一生懸命練習したもの。アメリカのフォークダンスも教える。

Q: 英語は、ネイティブスピーカーの教員が教えるのか。週に何回英語の授業があるのか、また、スピーキングの

授業があるのかテストについても教えて欲しい。

(B-15 尾崎さおり)

A: 中学1年と3年では、週4時間、中学2年生では週2時間英語の授業がある。英語の先生の力が高いため、ネイティブスピーカーの先生はいない。生徒のレベルに合わせて、80%以上英語で授業を進めるようにしている。本校ではスピーチを活性化させるために、スピーチの大会を開いている。また、英語のエッセイ大会も開いている。学年ごとにテーマを与えて、エッセイを書かせる。さらに、英語のスピーチ大会、ポップソング大会などがある。ポップソング大会は、英語がうまくなくてもポップソングが好きだという生徒は、参加させるようしている。教育の現状として、講義形式ではなく、自らの学力に合わせた学習法をしている。例えば、EBSEのサイトでe-bookを読み、ブックレポートを書かせている。

Q: ボランティア活動が盛んだと聞いた。私たちの学校では、介護福祉施設などに実践に行くが、韓国ではどのようにになっているのか。

(B-09 久保木絵美)

A: 本校は、福祉特別支援学校に指定されている。福祉の専門家が担当、1年に9時間ボランティアに行き、体験手記を書いたりする。資格をとるということではないが、いろいろな活動につながっている。

Q: 教科によって異なると思うが、宿題の頻度はどのくらいか？また、土日の過ごし方やスマートフォンの扱いについてはどうしているか。

(B-19 新長太)

A: 5割の生徒が放課後学校を利用している。放課後学校は、体育・技術など芸術系が多い。一般教科の場合は、初級・中級・上級にレベルが分けられて用意されている。土曜日は5~7教科があるので、それを利用している生徒もいる。夏休みには31教科実施され、約270人の生徒が利用している。夏休みは、4週間あり、そのうちの2週間、放課後学校が開かれる。休みの間の放課後学校は無料。礼拝などで来れない生徒は、別途、授業を行う場合がある。スマートフォンは、朝の会で集め、まとめて保管をする。授業で使う場合は、一度返し、また、集めて保管する。

宿題については、韓国では、成績に反映されるものを出す。一般的な宿題は、ほとんど出さない。

A(生徒): 土日の過ごしかたは、キリスト教なので、土曜日は教会に家族で行く。そこで、ボランティア活動をしたり、ドラムを演奏したりする。水曜日には、学習塾に行か

ず、教会で過ごす。

Q: 自由学期制について、どれくらいの時間取り組み、どのような講座が開かれているのか。また、最近行ったものを教えて欲しい。

(B-06 金田亜妃子)

A: (校長先生より) 1学期に中間テストを受けずに、様々な活動を行う。体育・美術などの芸術系の講座が8つほどある。2学期には進路対策を行う。2学期には、進路に関する講座があり、25人の講師を招いて、講座を運営する。

A: (生徒より) お花屋さんの仕事を実践し、こういう仕事もあるということを知ることができた。

A: (先生より) 自由学期制は試験がないので、学力低下があるかもしれない。しかし自由学期制は、進路を考えるときにも影響する。教師側が変わらなければ、生徒に合わせて授業をすることもできない。2学期が始まる前に、生徒が教科を選べるようにする(ブロック単位制度)。

Q: 自由学期制の途中で、別のことを取り組みたくなった場合に、変更することはできるのか。

(B-13 野村直美)

A: 初めから色々と融合して準備をする。家庭通信簿にもしっかりと記入し、生徒には考えさせるため、途中で別のことを取り組むのは難しい。

<韓国側からの質問>

Q: 社会の授業における現場学習をどのように実施しているのか具体的な実践方法について教えて欲しい。

A: 社会科は座学であるが、最近は手詰まり感があるため、アクティブラーニングを取り入れている。生徒を韓国大使館に行かせ、国連で話し合うような内容にチャレンジさせたり、最近では、18歳で選挙権がスタートしたので、模擬投票などをを行い、政治を考える授業などを取り入れた。しかし、まだ、成果においてはわかっていない。

(B-10 宮坂武志)

A: 社会科全般を担当している。講義形式は全くしておらず、アクティブラーニングのような形を10年前から取り入れている。特に、国語、社会、理科においては、話し合いを通して、課題を解決することによって学習をしている。例えば、地理分野において韓国について調べてきて、それを発表させる。韓国で一番魅力的なものを出し合い、討議する。優劣はつけず、その中で地理的なものを学習する。普段の授業で外に出て調べたりすることはでき

ないので、夏休みの時に宿題として、三重県について調べるなど、現場に出て学習させる機会を作っている。

(B-22 山崎秀規)

A: 本校は特殊な学校で、将来技能者として働く生徒を育てている。デュアルシステムというものがあり、夏休みに 1 年生は 1 週間、2 年生は 2 週間、地域の会社に実際に研修にでかけている。そこで、働くということはどういうことを学び、進路教育に高い成果を収めている。体験を行うことにより、生徒が今後どのような職業につくのか考える良い機会となっている。のために、地域の企業の方も非常に協力をしてくれ、企業も地域貢献の一貫として生徒を引き受けるということで取り組みを進めている。そして、そこで学んだことが学校にかえってからの授業で生かされていると感じている。

(B-12 西山直子)

A: 兵庫県では県の取り組みとして、中学校 2 年生が 1 週間、地域の企業で職場体験を通して、将来の仕事について学んでくる機会がある。また、地域で受け入れていただいているので、地域の子どもとして皆さんに守つてもらえるような活動として行っている。生徒数が約 1000 人いて、職場体験学習に参加する生徒が 300 人を超えていたため、地域の負担も大きい。今後、受け入れる側をどのようにして開発していくかが課題。

(B-18 濑谷瑞江)

A: 東京都にある学校で、東京都全体から集まつてくる。そのため、学校の周りのことはわからない生徒が多い。学校から外に出て授業を行うことは大変なことであるが、自分の周りにどんな施設があるのか、また、地図を見て、地形がどうなっているのか、また、その自然環境と社会環境の関係を学ぶ。

(B-07 川島勇行)

懇談会終了後、給食を食べ、副団長より挨拶を述べて見学を終えた。

(千葉県八千代市立萱田中学校 教諭 小林美帆)



李炳坤校長を囲んで記念写真(鹽光中学校)

【参加者の感想】

久保木絵美…………生徒が活発に学校生活を送っている様子がうかがえた。特に、学校紹介の中で、生徒が日本語での通訳を行っていることに驚いた。学校の理念や目標をもとに同じ方向に進んでいると感じた。生徒の可能性を信じることはもちろんだが、先生方が意欲的に授業や説明を行っているので、生徒の力が最大限に引き出されるのではないかと感じた。さらにボランティアの時間を教育課程に組み込んでいることで、「ボランティア精神」が生活の一部になっていくのではないかと感じた。
尾崎さおり…………鹽光中学校は、自由学期制のモデル校として優秀学校賞を受賞しており、地球市民教育の活動について多くの紹介がありました。この学校が印象に残った理由は 2 つあります。

1 つ目は、人前で生き生きと発表している生徒の様子が、あまりに堂々としていて日本の生徒とは少し違ったからです。学校紹介を日本語で行った生徒会長の表情、音楽に合わせポップダンスを披露していた少女たちの表情、どれを見ても、これが初めての発表ではなく、生徒たちが学んだことを誰かに披露する場を教師が多く作り、発表に慣れその場を楽しんでいる生徒の様子がとても印象に残りました。

2 つ目は、先生方の自信に満ちた表情です。英語の先生や体育の先生が、最後の質疑応答で私たちの質問に答える場面がありましたが、どの先生方もプライドを持ち地球市民教育や自由学期制に取り組んでいる様子が分かりました。教師としてのやりがいだけでなく、研修制度が確立されていることや、プライドをもって仕事に没頭している様子が心に残りました。

**ミチユホル
彌鄒忽 外国語高等学校 (B グループ)**
7月14日

代表者名:鄭正浩(チョン・チョンホ)

特色:人口300万人の国際都市仁川にふさわしいグローバル人材育成を目標に2011年に設立した公立特殊目的高等学校。生徒全員が寮で生活をしながら外国語教育、クラブ活動、学力向上プログラム、ボランティア活動などを通じて国際社会を主導する創造的なリーダーを育成している。中国語、日本語、フランス語、スペイン語など第2外国語の専攻教育課程を運営している。

まず、校長のチョン・チョンホ氏よりあいさつ、学校説明があった。続いて、副団長の根本明彦氏があいさつをし、今回の訪韓の目的などを述べた。次に日本語専攻の2年生の生徒が日本語で学校紹介をしてくれた。とても流暢な日本語で、中学1年生から勉強していると教えてくれた。この学校は英語を重視した教育課程になっており、それ以外に自由専攻科、仏語・中国語・日本語専攻科に分かれている。8クラス中、日本語専攻科は2クラスである。また全寮制であり、月曜から金曜まで学校に宿泊し、金曜の夜から週末は家で過ごしている。授業は8:30~16:00まであり、日本のセンター試験にあたる大学修学能力試験では全国22位の成績をおさめた。グローバル人材を育成することで外国語による活動が多く、英語学術大会や模擬国連、日本語、英語、中国語のディベート大会や外国语新聞の作成、広島県の加茂高校との交流などを行っている。また、ボランティア活動で小中学生に勉強を教えることもしている。

続いて学校の施設案内があった。ホームベースという場所があり、ここでグループ学習をしたりする。展示スペースにもなっており、生徒の作成した芸術作品等を展示している。寮内も見学できた。1部屋に2人で、トイレは2つある。図書室は朝5時から夜中の24時まで開いている。続いて授業見学をさせてもらった。2年生の理科の授業では光ファイバーでランプを作成しており、楽しそうに生徒は作成していた。1年生の英語では英語によるプレゼンテーションの授業を行っていた。流暢な英語であったが、4段階のうちの最低のクラスだといわれて驚いた。次の音楽の授業では英語で歌を練習していた。1年間のなかで1人1つの楽器を選んで演奏できるように取り組んでいるそうだ。どのクラスも女子が多く20名中12人が女子で8人くらいが男子という割合だった。移動する

廊下にはデジタル掲示版があり、大学修学能力試験までのカウントダウンが表示されていた。情報の授業では1人に1台ずつパソコンがあり、授業が行われていた。3年生の自習室はライティングデスクが一人ずつ用意されており、自分専用の自習スペースが確保されていた。机の周りには「寝ていたら起きて！」という張り紙やアイドルや家族の写真などが飾られていた。また、ウェイトトレーニングやランニングマシンなどがあるジムも用意されており、生徒たちは自由に使えるとのことだった。

最後に日本の教職員と日本語を専攻している1~3年生との懇談を行った。それぞれのテーブルをはさんでグループや1対1で懇談をすすめた。事前に生徒は韓国の教育について調べてきていて、大学入試が大変なこと、狭い地域で人口が少ないため有名大学への入学が就職につながると考えていることなどを教えてくれた。どの生徒も日本語でのやりとりが上手く驚いた。高校に入つてから日本語の学習を始めた生徒もいたが、中学1~2年生から始めている生徒も多く、興味を持った理由が日本のジブリをはじめとするアニメやマンガであることも分かった。現在日本語の授業は週に6時間行っており、将来の進路は外交官など日本と韓国の橋渡しになる仕事をしたいと話していた。この学校は特殊目的高校なので入試があり、英語と面接試験があるとのことだった。日本語専攻は1学年10数名が在籍しており、やはり一番多いのは中国語だとのこと。ビジネスでも日本から中国に移り変わっているのが理由にあり、将来の就職のことも意識している。時間は瞬く間に過ぎ、話し足りない雰囲気のなか、最後に記念写真を撮り、学校を後にした。

(東京都立国際高等学校 主任教諭 川島勇行)



理科の授業見学の様子(彌鄒忽外国语高等学校)

【参加者の感想】

橋隼人……生徒の語学力の高さや学ぶ意欲の強さに感心した。学校の授業だけでなく、夕食後も寮で授業があり、夜の 9 時 20 分から 11 時 50 分までは自習をする。受験勉強が激しいことは知っていたが、子どもたちの口から生活の様子を聞き正直驚いた。対話をした生徒は、大好きな部活も週に 1 回しかできないと話してくれた。しかしながら、「辛くないの？」と尋ねると「多少ストレスはあるが、楽しい」と話をしてくれた。その一番の理由は、将来 CA になるという目標を持ち学んでいるからであった。目標を持って学ぶ事、生徒がなぜ学ぶのかを見つける事は厳しい学びをも喜びに変える力があると知った。改めて、目標を持って学ぶ事、自分の意思を持って学ぶ事の大切さに気づく事ができた。一方、自分で選んだ学校に通っていない生徒は、たくさんストレスがあるという事も聞いた。目的意識・目標を持つ事と合わせて、自分の意思で決断する事ができる社会に変えていきたいと感じた学校訪問であった。

インチョンヤンチョン
仁川陽村中学校 (B グループ)
7 月 15 日

代表者名: チャン・ソクヒョン

特色: 2007 年 2 月 22 日、30 学級で設立許可を得て、キム・フンレ氏が初代校長として赴任した。現在は、第 4 代のチャン・ソクヒョン氏が校長を務めている。校訓を「誠実、誠実」とし、「共に夢見る世界文民」を教育目標に掲げている。2014 年から国際化自律政策推進学校を運営し、2015 年にユネスコスクールになった。

最初に、校長のチャン・ソクヒョンおよび根本副団長のあいさつがあり、続いて記念品交換が行われた。その後、担当教諭よりユネスコスクールの紹介があった。陽村中学校は、「共に夢見る世界文民(Dream Together Happy Together)」を教育目標に掲げ、2014 年から国際化自律政策推進学校を運営し、2015 年にユネスコスクールになった。同校は、ESD や GCED を、実践中心主題融合ブロック授業(以下、融合ブロック授業)で体系的に行っている。1 年では入門過程、2~3 年では応用課程として、全学年で GCED を実施している。

融合ブロック授業では、実践に繋がる教科の授業に取り組んでいる。英語では、「水は誰の物か?」というドキュメンタリーに関して討論を行っている。また美術では、今年の同校の GCED のテーマである「みんなが平等

に」を題材にして、6 月 20 日の「世界難民の日」を契機にして、難民の定義について学び美術展覧会を行った。さらに音楽では、「音楽で表現するアフリカの環境問題」を取り上げている。これらの授業の実践を通して「実践する世界文民」の育成を目指している。

ユネスコスクールの紹介後に、訪問団から質問があがり、同校の担当教諭が回答した。

Q: 融合ブロック授業による学校に変化があつたか。

(B-02 福井宏和)

A: 融合ブロック授業は、教科間を融合することや 1 つの教科を 2 時間のブロックとして行っている。融合ブロック授業は、教師間の協力と努力が欠かせない。また、準備のために時間も必要である。融合ブロック授業では、知識の詰め込みではなく実践に繋がる取り組みを行っている。アンケートから、生徒が良い方向に変化している事が見受けられる。

Q: 自由学期制の取り組みをどのように評価するか。

(B-01 根本明彦)

A: 融合ブロック授業は、自由学期制を利用して行っている。自由学期制中は、午前中に体験活動やプロジェクトを行っている。午後には、サークル活動や進路体験に取り組んでいる。生徒の融合ブロック授業での取り組みの過程を評価している。融合ブロック授業の準備と評価は大変なことであり、教師の融合ブロック授業の資質を高めるために、研修を行っている。

続いて、実際に中国語と音楽と英語の融合ブロック授業を参観した。中国語の授業では、同国の少数民族問題について討論を行っていた。音楽の授業では、ESD の視点から環境を捉えていた。生徒たちは、韓国民謡を基にして環境に関する歌を作詞していた。また英語の授業では、Water changes everything を視聴し、水に関する遊戯詩(water acrostic poem)に取り組んでいた。あるグループは、Water is the Authority That is given Everyone Reasonably と詠んでいた。

授業参観後、日本教職員が 2 学年の 5 クラスで日本文化を紹介する授業を行った。中でも金田亜妃子教諭 (B-06) は、2 年 5 組で「畳む・折り込む」をテーマとして日本の文化を紹介し、生徒と折り紙をした後、次のようにしめくくった。

「皆さん。紙が蝶になりました。折り紙は、限られたものを工夫する遊びです。これは、限られた空間を工夫して上手に利用するという現実の生活にも通じることだと思

います。私たちは、1つしかない地球に住んでいます。今日の授業が、地球の持続可能性について考えるきっかけになれば嬉しいです。ありがとうございました。」



日本教職員による日本文化の授業(仁川陽村中学校)

日本教職員による文化授業終了後、学校給食体験が行われた。とても美味しい給食だった。キムチが添えられており韓国の食文化を感じることができた。



同校の給食。手前左は参鶏湯（仁川陽村中学校）

(徳島県阿波市立吉野中学校 教諭 梶泰三)

【参加者の感想】

羽田真……陽村中学校では日本文化紹介授業を行いました。事前の準備に最も時間をかけたことでもあり、大変印象に残りました。社会科教員4名で、それぞれの地域(東京、鎌倉、富士山、沖縄)の文化や歴史、見どころなど、多岐多様な日本の姿をうまく分担して伝えるとともに、生徒の日本への興味関心を増すことに成功したと感じます。私はすべて韓国語で授業を行いました。初学者であるため使える表現にかなり限りがありましたが、それでも予め構想した内容を覚えておき、教壇ではペーパーレスで(読み上げではなく)生徒と視線を交えながら話をすことができました。私の話した内容に生徒が反

応してくれることや、積極的に参加してくれることがとても嬉しく、韓国滞在中に最も印象に残る時間となりました。また、予想以上に生徒たちは日本のことによく知っていると感じました。おそらく日本の中学生は韓国についてほとんど知識や関心を持っておらず、日本の教育は大いに改善する余地が残されていると思いました。

佐山好英………地球市民教育に対する取り組みで、期間を指定した融合ブロック授業を拝見したが、教員の熱意と創意工夫がなされた授業内容に感銘を受けた。1学期という短い期間で様々な取り組みが行われており、全教員が一丸となって指導にあたっていることがよくわかった。

インチョンマンス 仁川萬壽高等学校(教育交流会を含む) (B グループ)

7月15日

代表者名:李海景(イ・ヘギョン)

特色:2008年に開校し、現在は30学級1000余名の生徒が学んでいる公立の男子高等学校。学力レベルの割に進学実績が高いという評判を受けている。それは、知識を詰め込む教育から体験型、実践型への教育方法転換が評価された結果である。実践例として、エコケメックス・クラブが8年間近隣河川の環境問題に取り組み、川の水質を関係機関に連絡する活動や、数学サークルが小学生に勉強を教えるボランティア活動が学校紹介の中で紹介された。特色ある教育として、「温故知新、新通・方通プロジェクト」などがある。

中庭で8名の生徒による歓迎の意味をこめたサムルノリの演奏披露が行われた。また中庭に向かい、多くの生徒が校舎内の窓から顔を出し、「こんにちは」と叫ぶなど、温かい雰囲気で訪問がスタートした。

図書室に移動し、校長のイ・ヘギョン氏による学校の概要説明を受けた。仁川市教育庁の職員、教員が5名ほど会に参加した。

イ・ヘギョン校長は、以前、彌鄒忽外国語高等学校の校長を務めた経験もあることから、現在の韓国教育の変換期を、学力だけでなく、人格教育に力を入れている時期と捉え、同校の教育理念が現在の変化に対応していると自信を持って述べた。特に、学校の特色である、地域に根差した教育活動の様子がVTRでも紹介された。

根本副園長は、「子どもたちの歓迎にとても感動して

おり、すでにこの学校が好きである。萬壽高校訪問前に授業を実践し、教員としての感動を味わい、直後に来た学校で生徒たちが窓を開けて挨拶をしてくれたことが嬉しかった。現在日本でも、教えることから考えることへの転換が行われ、沢山の課題に面している」と述べた。その後、双方からの記念品交換が行われた。

視聴覚室に移動し、生徒活動の「Elevator Speech」というスピーチ大会を参観した。リーダー研修の一環で「学校をよくするために」という題のもと 1 年～3 年までの生徒が 12 名参加していた。3 分以内でどれだけ相手を説得できるかを目標に 4 名の教師が指導にあたり、そのうち 3 名が評価を 1 名が司会を行っていた。1 年の「今どういう人柄が重視されているか」という内容のスピーチと 2 年の「思いやりと気配り」というスピーチを聞いたが、2 年の生徒の発表は 1 年の生徒に比べ身振り手振りを使い自信を持って発表を行っていた。

次に、英語専用室に移動し、生徒との懇談会を行った。懇談会のテーマは 3 つあり、「入試制度・進学」、「日本文化・教育」、「部活」であった。また、懇談会に参加した生徒は日本語クラブの生徒であり代表の生徒の歓迎の言葉の後、懇談会が始まった。懇談会には日本語を学んでいる近隣大学の学生が通訳ボランティアに来ており、萬壽高校の生徒が言葉に詰まると、助ける様子も見られた。学生との懇談会の後、近隣の学校から集まった先生方といじめ・英語教育・ESD・GCEDなどをテーマにグループディスカッションを行った。

(千葉県八千代市教育委員会 指導主事 尾崎さおり)



GCED をテーマに意見を交わす日韓の教職員
(仁川萬壽高等学校)

【参加者の感想】

西山直子………学校の状況(地域性や生徒の状況等)が勤務校と類似する点が多く、ESD にいかに取り組ん

でいくかを具体的にイメージしやすかった。生徒や先生方との懇談も率直な意見交換ができる、共感することが多く、英語の先生方とは可能であれば、今後もお互いに授業のアイディア等で積極的な交流をしたいと思った。交流相手の先生が教科書や教育課程、時間割等の資料を持参してくださっていたのが大変ありがたかった。私も、資料を持参していればよかったです。

生徒との意見交換も、飾らない生徒の姿を目の当たりにすることができて、本校生徒との交流も可能ではないかと思うことができた。交流した韓国の生徒の日本語の運用能力に驚いた。校長先生によると、決して成績のレベルは高いはないとことだったが、「好きこそもの上手なれ」を実感できた。「好きなこと」で生徒の英語力を伸ばしていく授業展開を考えるきっかけとなつた。また韓国の生徒たちは日本生徒は韓国文化に関心を持つて韓国語を勉強する生徒はないので、教師として生徒がもっと世界に目を向ける機会を授業の中で与えていかなければと痛感した。

野村直美…………学力本位ではなく、生徒の活発な自主活動が中心の学校作りに感銘を覚えた。英・数・国の中でも地元長壽川の水質を 8 年間にわたり観察し環境生態系を分析するサークル活動は高く評価され、今では大学の専門家や地域行政と連携して環境保全活動につながっている。これは我々の理想とする問題解決学習の姿といえる。また、地球市民教育にも力を入れているが、その理念の根本に「国際理解は自己理解である」との学校説明には我が意を得たり、との思いだつた。韓国文化理解の一環として各クラスごとに、家庭科・化学の教科と連携して味噌やコチジャンを作る学習を続けており、学校のブランドとして、地域のバザーなどで販売し、経営も同時に学ばせているとのことだった。このような生徒が主体の活動が花開く背景には、校長先生の「常に一步離れた所から生徒を見守るよう心掛ける」という教職員の努力が必要なのだと実感した。

4. スタディーツアー ホームビジット

A グループ

芙蓉臺、屏山書院、安東河回村

B グループ

仁川延壽図書館、月尾公園

A・B グループ

ホームビジット

A グループは、グループプログラムにて訪問した慶尚北道で芙蓉臺、屏山書院、安東河回村を、B グループは、仁川にて延壽図書館と月尾公園を訪問した。7 月 16 日は、それぞれの地方でホームビジットが行われた。

**ブヨンサン
芙蓉臺（A グループ）**

7 月 16 日

特色：慶尚北道安東市は、歴史と文化の町として知られ、その代表格が安東河回村である。瓦葺きや藁葺きの家屋が良好な状態で保たれていて、ユネスコ世界遺産に指定された。村の名は、川が村を S 字型に回るように流れていることから名付けられた。その河回村を見渡すとのできる高台が、芙蓉臺である。

ホテルから 20 分ほどで芙蓉臺のある高台入口に着いた。ここからは、特別に同行した安東市の観光課の方より案内を受けた。

河回村は、豊山・柳氏が 600 年あまり代々暮らしてきた村で、儒学者柳雲龍と文祿の役の際の柳成龍兄弟を輩出したことでも有名である。この村には高麗時代末から人々が住むようになり、この村の創立者（当時の建設省の大蔵）が、周りの山を全て登ってから、ここに村を作ったら一番いいと考えて村を作った。ここから眺めると左から右（東から西）に川は流れている。地理的にも素晴らしい場所で、ここで暮らせば末永く子孫が幸せに暮らすと考えた。

1999 年 4 月、イギリスから女王陛下が訪れたのをきっかけに、この地が大変有名になった。

（東京都狛江市立狛江第三小学校 主幹教諭 森谷亨）

【参加者の感想】

森谷亨……当日はあいにくの雨だったため、山を登るのも一苦労であった。この先一体何が見られるのか不安な気持ちもあったが、たどり着いてみると、山の頂上からは河回村が一望でき、ここに村を作りたいという昔の人々の考えを理解することができた。小雨が振り、霧が立つような情景であったが、それがかえって風情を増し、その景観を堪能することができた。

**ピョンサン
屏山書院（A グループ）**

7 月 16 日

特色：屏山書院は、1572 年に豊山・柳氏の教育機関である豊岳書堂を、屏山に移築したものである。その後、多くの崇拝する方々を祀り、1863 年に屏山書院という賜額を授かった。屏山書院は人文的・歴史的意義だけでなく、美術史の観点からも朝鮮半島の中でもっとも美しい書院建築であり韓国建築史の白眉といえるものである。

屏山書院は、朝鮮時代の代表的な儒教的建築物で、河回村出身で当時総理大臣を務めた柳成龍が弟子たちに教えを諭した場所である。また柳成龍が亡くなった後は、その教え子や近隣の儒学者が故人を偲び、位牌を祀るために書院内に祠を建てた。

現在は主に法事を行う機能のみに使われている場所であるが、人材育成も違った形で続けられている。ここ屏山書院は昔から國から与えられる財源で支えられてきたが、その財源を使って特別に指定された総合高等学校に昔ながらの資料などを利用して人材を育成している。そのため、その高等学校の生徒は年に 2 度行われる法事の時に参列している。

韓国には数多くの書院が残されていたが、数が多すぎたこともあり取り壊すことになった。しかし、この屏山書院は保存状態がとても良好で建築様式も素晴らしかったため、残されることになった。

建物の周りには自然が多く、風光明媚な場所に建て

られ静かで快適な雰囲気である。とても神聖な場所なので、服装などは綺麗にしてから入る場所である。秋には紅葉がきれいで七つの屏風を見るような感じがする。

東側にも西側にも学生のための寮があり、この家で暮らしながら学問をしていた。東側の扉の奥には、学生たちの食事を作る食堂もあった。奥には印刷所があり木版印刷で本を作ったりもしていた。昔の学生たちは、授業を受けるというよりは自習を主にしていて、試験を広間で受けている。学生たちが勉強で苦しんだ時は、この広間に来て風景を眺め、心を落ち着かせていたという。床の下には空間があるのでこの中に薪で火を焚き、暖かい空気を流して床を温かくしていた。

(東京都狛江市立狛江第三小学校 主幹教諭 森谷亨)



屏山書院にて

【参加者の感想】

森谷亨…………観光課の方の計らいで、屏山書院の一番高い所にある広間に特別に上がらせていただき、当時の学生と同じように屏山を眺めることができた。屏風を広げたような優雅な稜線を湛えることから名づけられたという屏山の風景を、勉強に勤しんでいた学生たちはどのような思いで眺めていたのかと思いをはせた。

周りの自然とうまく調和している木造建築だと感じた。

アンドンハフェマウル
安東河回村 (A グループ)
7月 16 日

特色: 安東の地に、川が蛇行し、一定の土地を囲む場所があった。その地は、たとえ洪水が起こったとしても、川の流れの内側であることから、安全な地として評価を受け、村づくりがなされた。高麗時代、今から 600 年前に移住して以来、子孫がこの村の存続に貢献している。

河(川)が取り囲んでいる(回っている)村であることから、河回村となっている。2010 年世界文化遺産に指定された。

村全体の様子とその土地に根付いた伝統文化について、次のとおり見学した。

(1) 民の暮らし

幾つもの家から構成されている村であるが、屋根の作られ方が異なっている。瓦で構成されているところは貴族(両班:ヤンバン)、藁で構成されているところは平民の住居であった。

(2) 建物の紹介

評価の高い建物の 1 つである忠孝堂を見学した。部屋づくりの工夫がなされ、太陽の光は差しこみやすくとも、暑さを防ぎ、風通しをよくすることができている。

(3) 河回村仮面舞踏

仮面が作られた経緯は、次のとおりである。昔、病が広まり、人々がその原因を考えた。夢の中で、地の神が怒り、それを鎮めるために、仮面を作れとの声を聴いた。青年が山の上に登り、100 日間かけて仮面を作ろうとした。12 個目の仮面を作っているとき、様子を心配して覗きにきた青年の彼女が窓から見たとたん、青年の命が潰えた。仮面の中に、1 つあごのないものがあるが、それは、彼が制作途中のものであった。仮面を被り、踊ることによって、村の病はなくなった。現在は、戦争で焼失した 3 個を除く、9 個の仮面が残っている。ユーモアを交えた語りと踊りは、見ている者の心をくすぐるものであった。

(東京都狛江市立緑野小学校 校長 大場一輝)



安東河回村の伝統的な家屋

【参加者の感想】

大場一輝…………韓国精神文化の拠点である安東は、伝統や文化を維持、継続させるため、人々は環境を保全し

つつ、自然を生かした保存に努めていると感じた。韓国の国民性がダイレクトに表現されているこの地に訪れる機会を得たことは、たいへん貴重であり、河川を含めた村全体が、生涯忘却することのない原風景となつた。

インチョンヨンス 仁川延壽図書館(Bグループ)

7月16日

特色:仁川広域市南部延壽地区の住宅街にある市立図書館である。仁川市内にある69の市立図書館の中でも、交通の利便性が高い延壽図書館は、一日平均2800人が利用する稼働率の高い図書館である。地下1F~地上3Fの建物で、1Fは児童閲覧室や障害者用の学習室、デジタル資料室、生涯学習室、2Fには一般図書などを置く総合資料室、3Fには学習スペースとして利用できる一般閲覧室、地下1Fは多目的講堂といった施設を備えている。

最初に施設説明と延壽図書館の事業についての説明を受けた。訪問日は土曜日で、夏休みの特別プログラムとして高校生による青少年文化討論会が予定されているということで、そのプログラムの一部も参観できるとの話があった。

その後、2班に分かれて施設を見学させてもらった。1Fの児童閲覧室には、「読み聞かせ」ボランティアとして、この日は2人の女子高校生が待機していた。お年寄りのボランティアも多いそうだ。また、小さな子供でも自分で貸出・返却手続きができるように、イラストで説明されているタッチパネル式の装置が導入されていた。子供に限らず、貸出・返却は利用者自身が操作する装置が導入されているため、図書館の職員は貸出・返却業務に時間を割かれずに、それ以外の業務に専念できるそうだ。障害者用の学習室では、利用者の身体に合わせて机の高さも調整できる学習机が備えられていた。障害者用の学習スペースが整備されているのは、この延壽図書館だけそうだ。デジタル資料室では、老人向けのパソコン教室が開催されていた。また生涯学習室では、地元の子供たち(小学校3年生から中学生)がミュージカルを学んでいた。自分たちの地域について学んだことをミュージカルで発表するため、外部から招いた講師から専門的な指導を受けていた。パソコン教室やミュージカルなど、この図書館で用意されている全てのプログラムは、全て無料で受講できる。

2Fの総合資料室では、老人向けの大きい文字の本が多数備えられていた他、拡大鏡やページをデジタル処理で拡大して読むことのできる書画カメラなども設置されて、高齢者への配慮が行き届いていた。

3Fの一般閲覧室では、生徒が勉強する姿が多く見られた。以前は3Fにパソコン室を置いていたが、個人のパソコンが普及したので、現在は勉強できるスペースを増やすためにパソコン室は廃止したという。

最後に、地下1Fの多目的講堂で行われていた「青少年文化討論会」の事前講演会の冒頭を参観して見学を終えた。この日の午前は、仁川市内の高校で哲学を教えていた先生が生徒に講義をし、午後にテーマ別討論会をする予定となっていた。参加していた高校生は自らこのプログラムへの参加を希望し、仁川市内の高校5校から選抜された、向学心旺盛な生徒たちであった。

(長野県中野西高等学校 教諭 中村弘子)



児童閲覧室で貸出機械の説明を受ける様子(仁川延壽図書館)

【参加者の感想】

中村弘子…………この延壽図書館は、利用者の73.5%が成人であることが大きな特徴だ。資料室に設置されていた大きな文字の本や、拡大鏡の設置などといった高齢者に配慮したサービスは、超高齢社会である日本でも、もっと導入を進めるべきではないかという感想をもった。

また、国際都市である仁川を象徴するように、児童文学も国際色が豊かで、外国の絵本・児童文学も数多く備えられていた。この日は日本の児童文学や絵本を前面に配置して、我々日本からの教職員を歓迎してくれていた。

この図書館の一番大きな特徴は、地域のコミュニティセンターとして大きな役割を果たしていることである。地域の子供たちがミュージカルの勉強をしてたり、老人向けのパソコン教室を開催していたり、高校生による弁論大会が開かれていたり、まさしく、文化発信の拠点として

機能している。そして、こういった特別なプログラムを実施するにあたり、外部講師に支払われる費用が受講者負担ではなく、仁川市や企業からの寄付で賄われているというのも見習いたい点だ。

ウォルミ
月尾公園 (B グループ)
7月16日

特色:韓国の玄関口となった仁川広域市は、朝鮮戦争の際に、戦況を一気に逆転する切っ掛けとなった連合国軍による「仁川上陸作戦」が決行された場所である。

月尾(ウォルミ)公園は、まさに作戦の最初の上陸地点であり、朝鮮戦争から 50 年間は軍部が駐留を続けていたために市民の立ち入りが制限されていた。2001 年仁川市が国防部から引き継いでからは、1000 億ウォンの事業費と 10 年の歳月をかけて、自然と歴史、伝統文化が調和した文化観光公園を造成し、市民の憩いの場、仁川市を代表する観光スポットとなっている。

公園内には、韓国伝統庭園、伝統文化研究院、月尾公園展望台といった施設が整備され、韓国の自然・伝統文化に触れ合うことができる。

最初の 1 時間は公園内を自由散策する時間が用意されていたが、あいにくの雨で半数以上の参加者が伝統文化研究院の施設内の見学をした。この月尾伝統文化研究院には、朝鮮王朝時代の伝統的な衣食や通過儀礼に関する風習などについての展示物があり、韓服(ハンボク)の試着体験もできる。韓服は、かつての王侯貴族が着用していたものを簡略化したタイプのもので、着用に要する時間は 1~2 分である。試着後には記念写真を撮影する場所も用意されていた。韓流歴史ドラマで目にする女性用の三編みの付け毛(カチュ)のかつらも用意されていて、韓服とかつらをつけて王妃の気分を味わうことができた。また、貴族=両班(ヤンバン)の館の内部が再現されていて、さまざまなお祝いの席の膳が展示されていた。

12:00 からは地下 1F の飲食体験館にて、韓国の伝統的な宮廷料理である「クンジョン・チムタク」の料理体験と、試食を兼ねた昼食の時間となった。この料理体験館は、有名な韓流ドラマ「チャングムの誓い」で料理監修をした著名な料理研究家のハン先生が開いたもので、この日はハン先生直々に指導をしていただける貴重な機会となつた。チムは蒸し煮、タクは鶏の意で、「チムタク」は丸

鶏を野菜や麺などと一緒に煮込んだ料理である。もともとは慶尚北道安東(アンドン)の郷土料理だそうで、安東チムタクには春雨が入れられているそうだが、今回の宮廷チムタクには春雨などの麺類は入らないということだった。鶏肉をニンジン、タマネギ、ジャガイモ、干し椎茸などの野菜と一緒に、タマネギの皮からとっただし汁、醤油、酒、砂糖、ショウガ汁、ニンニク、ゴマ油、水飴などの調味料で味付けして煮込んで作る料理である。韓国の伝統料理であるが、上品な味で、日本人の我々の口にもとても合う、そしてどこか懐かしさを感じる味であった。

(長野県中野西高等学校 教諭 中村弘子)



韓国料理体験の様子(月尾公園飲食体験館)

【参加者の感想】

大久保聖子…………ここでは、伝統衣装体験と韓国料理の実習を経験しました。初めて韓国の衣装(ハンボック)に袖を通しました。また、昔の三つ編み「カッヂェ」を頭につけ韓国ドラマに出演したような気分を味わいました。その後、「チャングムの誓い」の飲食総監督にお会いして、直接、宮中チムタクの作り方を教えて頂きました。日本でいうだしに玉ねぎの皮の煮汁を使用するなど、薬膳的な意味ある料理だと思います。日本に帰宅したその夜に早速、自宅で再現して味わいました。韓国で口にしたものは、全て美味しいものばかりでした。今回体験したことを、高校の家庭科の授業などに取り入れていきます。

ホームビット (A・B グループ)
7月16日

百田明弘…………日常の家庭の様子を見せていただくことができました。保健の先生のお宅で公務員のご主人と中 3 と小 6 の娘さんというご家庭でした。土曜日でしたが

仕事帰りのご主人と娘さん、ペットの可愛い犬2匹、カメや小鳥も温かく迎えてくれました。全員英語を話すことができましたし、日本語も少しできました。私の家族とほぼ同じ家族構成でしたので、興味深く毎日の生活やライフスタイルについて質問することができました。まず、娘さんたちと一緒に持参した筆ペンでひらがなや漢字を書いてみようと提案すると、中3の娘さんは難なく書くことができました。中2の授業で日本語を習っただけでなく、家庭でも自主的に日本語を学習しているとのこと。夢は客室乗務員ということで積極的な娘さんでした。次に教科書を見せてもらえるか聞くと中学生は見せてくれましたが小学生は学校に置きっぱなしのこと。分厚い教科書をみたら納得です。下の娘さんは絵が上手で絵を見せてくれました。夕食は豪華晚餐料理というより心のこもった家庭料理という感じでした。家事の分担など見習う点もありました。娘さんたちは塾も忙しいようですが、必ず4人一緒に夕食を食べるというのが印象に残りました。大人はスポーツなど夜も自分の時間を楽しんでいるということにも感心しました。韓国の豊かな心の一面がこういった家庭環境からも生まれるのかなと感じました。

梅澤一久…………吉州小学校の先生宅へ訪問して、部屋をくまなく紹介していただいた。生活の様子が良くわかり、室内に家族写真が掲示されており、家族を大切にしていることが伝わってきた。また、民族伝統文化の人形が大切に飾ってあり、地域を大切にする精神を学んだ。お茶会においては自宅が文化遺産であり、大切に保存しており、伝承者として自覚を持って受け継いでいる家長としての姿勢を伺うことができ、大変であるにもかかわらずプライドを持って日々過ごしていることが伝わってきた。

中学校・小学校の訪問を通して学ぶ側の様子や学校の姿勢が良くわかり、ホームビジットにより教師の姿勢も伺うことができたのは大きかった。韓国も日本も教育課題は、基本的にあまり変わらない状況もわかり、ユネスコの目指すところの郷土愛や国際人、世界人民としての自覚を教師側もしっかりと持っていることが大切であることを互いに確認することができた。特にお茶会で、文化遺産でもある御実家を拝見した時に、惜しげもなく様々なものを披露してくださり、さらに忙しいさなか練習時間を持つて、伝統楽器の演奏を見せていただいたことに感激しました。現在『おもてなし』という言葉は日本で流行語のように使われていますが、韓国で真の意味を再確認しました。



吉州小学校のユン・ヨンジュ氏のご自宅にて、ホームビジットに訪れた日本教職員とのお茶会

西山直子…………仁川初日の歓迎晩餐会の際にホストファミリーと同席になり、ホームビジットでの希望を聞かれ、その希望通りにお付き合いくださいました。市内散策中は、教育のことや普段の生活などこれまでこのような機会があれば聞いてみたいと思っていたことに対して、丁寧に答えてくださいり、韓国に対する理解が深まった。ご自宅にお邪魔した際には、ご家族で迎えてくださいり、とても暖かいご家族の雰囲気を感じることができた。韓国的一般家庭の様子を見てることができて一層韓国の人々を身近に感じることができた。

散策の際の食事の場に、彌鄒忽外国语高等学校の校長先生がお忙しい中わざわざおいでくださいり、そのおもてなしの気持ちがとても嬉しかった。改めて、おもてなしとは何かとかその大切さを考える貴重な経験であった。

大久保聖子…………私は仁川市内の小学校の先生のお宅に訪問させて頂きました。初めに、仁川総合魚市場に魚介類購入に同行しました。日本でもお馴染みの魚介類も沢山ありましたが、その種類の多さと巨大さには驚かされました。中でも、一番驚いたことは、「エイ(韓国語ではホンソオ)」が台の上にいくつも列をなして置かれている光景でした。日本では水族館にいる魚としか認識していませんでした。もちろん日本では食べることは稀ですが、韓国では煮たり焼いたりして口にするそうです。ホームビジットでは、ひらめの刺身・蒸し貝・チヂミなどをご夫婦で料理してくれました。キムチ専用の冷蔵庫も拝見しました。ごく一般的なご家庭の温かい日常の様子を味わうことができました。もう少し英語・韓国語が堪能ならもっとよかったですと思うのですが、あつという間に4時間が過ぎてしましました。人柄もよく、本当に楽しい一時でした。今回の訪問で、益々韓国との相互理解が大切と痛感いたしました。

5. 成果・ これからの活動

成果報告会

個別成果報告・A グループ

個別成果報告・B グループ

随行者のコメント

成果報告会

(於：イビスアンバサダー釜山)

7月 17 日

2016年7月17日(日)の14:30～16:00にかけて、釜山イビスアンバサダーホテルのOrchidホール(17階)にて、本プログラムの報告会・閉会式が行われた。参加者は、日本教職員韓国訪問団(48名)、イム・ヒョンムク韓国ユネスコ国内委員会事務総長補、慶尚北道教育庁マ・スクチャ奨学官他で、司会はソ・ヒョンスク韓国ユネスコ国内委員会教育チーム長が担当した。初めに司会者より参加者の紹介があり、その後、グループごとにプログラムの成果を報告した。

A グループのまとめ：

本プログラムを通して、韓国は創造性や主体性を育む教育の具体化に努めていることを強く実感しました。また、教育活動を充実させるにあたり、教育課程の具現化、教師のプライドを高める研修、保護者の信頼を得るための広報、社会との連携などを明確に示した上で、取り組まれていることを理解することができました。私達一人一人は、それぞれの立場において、現在取り組んでいる教育活動を更に推進していくことに自信を持って取り組んでいきたいと考えています。

B グループのまとめ：

今回、韓国のユネスコスクールを4校訪問させていただき、学ぶべき点が非常に多いと感じました。具体的には、自由学期制、ESD、地球市民教育に取り組むことを通して、学校が同じ方向に向かっていることがよくわかりました。今回訪問した学校のように、生徒も職員も学校が一丸となって、世界の諸課題を解決していくとする社会づくりの担い手をはぐくむ教育に、ぜひとも取り組んでいきたいと考えています。また、国際理解・国際交流という観点からも、今回出会った、明るく、エネルギーのある韓国の方々や生徒たちとのつながりは大変貴重なものでした。それぞれの勤務校へ戻った際には、生徒・教職員に今回の様子や成果を報告し、国際的な意識を高め、このつながりを一層深めていければと思います。

(千葉県立鎌ヶ谷西高等学校 教諭 大久保聖子)



報告会の様子(イビスアンバサダー釜山)



閉会の挨拶を述べる金澤団長(イビスアンバサダー釜山)

個別成果報告・A グループ

It's interesting!

A-01 金澤 裕司

「最も有意義だったのは何か」と問われて即答できないほど、全てが有意義でした。心のこもった歓迎、豊富な教育情報、風景、食物、子どもたち、やっぱり全てが有意義でした。

印象的だったのは、受験競争の激しさです。以前からある程度は知っていましたが、直接聞いて驚くことが多くありました。

しかし、受験競争については、表れ方に違いはあるって日本も同様ではないかと思いました。その違いがどこから来るのかが気になりました。

このような日本との共通点と相違点について考えさせられた旅でした。つまり出発点は同じだと思われるが、大きな違いが生じている現象が多くあるように思われたのです。その背景には、両国の歴史や地理的条件による文化の違いが存在しているように思います。この「似ているけど少し違う」二つの国が友好関係を発展させつつ今後どのように変わっていくか、興味深いテーマだと思いました。

●これからの活動予定

- ・羅臼の海と海の生物に関する情報などを伝える交流
- ・訪問校への情報発信

「自分たちこそがユネスコの姿!」

A-02 阿部 紀子

韓国に実際に行くまでは、韓国のユネスコスクールやESDの状況はまったく分からず、むしろ受験競争が激化しているイメージがあったので、果たしてESDを推進していくける状況にあるのか疑問だった。

しかし、実際の学校現場を見てみると、まだ学歴重視の社会であることがうかがえる部分もあったが、子どもたちが未来の自分や、家族、地域、さらに自分たちの国である韓国や世界のことも考えて、今を生きていることがよく分かり、教職員たちもそれを手伝おう、応援しよう、という姿勢でした。

最も印象的だったのは、安東永明学校で「自分たちこそが“ユネスコ”的姿だ、と言えるように、自信をもって活動する」という姿勢に感銘を受けた。

熊本募金をはじめ、世界に関心をもって行動したり、地域の企業と提携してサンチュの水耕栽培をしたり、生徒が社会に出やすいように学校企業を作ったりと、たくさん実践をしていた。

何よりも子どもたちも教職員の方々も、全員明るい表情で、笑顔の絶えない学校だったことが心に残っており、私たち日本の教職員も明るく笑顔の絶えない学校作りに取り組んでいかなければいけないし、そのために自分に何ができるか、どう変容できるかが、自分のこれからの課題であると感じている。

●これからの活動予定

- ・勤務校に韓国でふれた文化（韓国の給食や伝統音楽）を紹介する

その先へ

A-03 青木 宣廣

今回、最も思い出になったのは、吉州小学校での授業である。はじめは、自分が外国で授業だなんて考えもしなかった。ただたどしい韓国語でいさつしたとき、拍手してくれた6年1組の子どもたち。真剣に話を聞き、リアクションをしてくれる姿ややりとり、キラキラした表情に子どもたちの本質は変わらないのだということを感じた。

また、どこに伺っても韓国の方々のあたたかいおもてなしを受けたことも感慨深い。交流とはまさに人と人とのコミュニケーションである。今回のプログラムに関わった全ての人から受けた感銘は、自分のこれからの教員生活、いや人生の価値観をも変える内容であった。貴重な機会を与えてくださった全ての方に感謝し、次は自分が周りに対して還元をし、さらに成長していくことが使命なのだと思う。

●これからの活動予定

- ・子どもたち、保護者、先生方、地域の方に今回の韓国での経験を共有、できることを考える

子どものよりよい姿へのアプローチ **A-04 本田 将貴**

全体的によいプログラムが多かったが、やはり大人同士の関わり合いだと、あまり腹を割った話し合いができないように感じた。例えば、それぞれの学校や教育庁などで紹介される教育の内容は、最終的な目標や理想の紹介が多く、あまりその時の現状や課題が紹介されていなかった印象があった。私の個人的な解釈だが、日本と韓国それぞれの教育の目標と、今の現状や課題を共有することで、お互いの教育を切磋琢磨することがこのプログラムの目的ではないかと考えていた。そのような意味では、韓国の教育の良いところしか知ることができなかつたように思う。

それとは裏腹に、それぞれの学校での子どもとの関わりや吉州小学校での授業体験は、子どもたちの素直な反応や表情を見ることができ、とても勉強になった。韓国的小学生も、日本の小学生と根本的には何も変わらないのだと感じた。やはり、あとは大人がどのような指導、育て方をするかで子どもの姿は変わってくるのだと痛感した。今回の経験を生かして、今後の指導の仕方を模索していくたい。

●これからの活動予定

- ・手紙のやりとりやスカイプでの交流

「～したい」から「必然の学び」。

そこからESD。

A-05 今本 雅隆

韓国で「祭りと文化」の授業をさせていただいた。楽しそうに笑い、前のめりになって授業を受けている姿は、万国共通なのだと思った。言葉の壁があり、伝えたいことがたくさんあったが準備をしていたことしか伝えられず、児童の質問に答えることができなかつた。私自身、語学の学びに必要性を改めて感じた。韓国の人たちには英語で授業を受けており英語で話をしたいと思った。

自校の子どもたちは、韓国の人たちと交流するために張り切って歌やダンス等の準備をしていた。自校の子どもたちの歌やダンスをスカイプを通して直に見たり聴いたりして、韓国の人たちは、私の町、熊野町に興味をもっていた。授業後の感想の中に日本の子どもたちの生活や、日本の文化について知りたいという記述が

あり、これからも交流をしたいと思う。

自校の子どもたちは「次は～をしたい」「～ができるなら楽しそうだから～をしないといけないね」などと言っていた。自分たちで課題を見つけ、課題解決をしようとしていた。子どもたち自身が韓国の児童とつながりを持つことを願い、主体的に取り組む姿を見て嬉しく感じた。そのために、子どもたちが自分の考えや思いを発信できるような力をつけたり、いろいろな体験ができるよう、取り組んでいきたいと思った。

●これからの活動予定

- ・児童に韓国の文化、子どもたちの学習や生活について伝える
- ・文通や映像交換などの交流

子どもの成長を願う気持ちちは同じ

A-06 糟谷 明洋

最も印象に残ったのは、文化交流授業である。わたしは、授業者ではなく梅澤先生の手伝いとしての役割を担った。内容は、日本文化として折り紙を子どもたちに伝える授業であった。わたしは机間指導として、折り紙の折り方を子どもたちに個別にアドバイスをした。韓国の人たちは日本の子どもたちと変わらず、出来上がった紙風船や手裏剣を見せてきたり、折り方を教えてほしいと身振り手振りで伝えたり、難しいところを作つてほしいと甘えてきたりした。わたしは韓国語ができないので、英語で子どもたちと会話していたのだが、褒めるときにこつと笑い、助言するとお礼を話す姿は本当に微笑ましく、教師としてのやりがいを感じた。

この他のどの研修でも韓国の方は子どもの能力を最大限に引き出そうと熱心な取組を行つており、行政もそれを支えようとしていることを感じた。自分の認識が新しくなるプログラムばかりであった。このような韓国の学校の姿を多くの方々に伝えていくことも自分の役割であると考えている。

●これからの活動予定

- ・韓国の人小学校（金海市オバン小学校）との児童同士の文通

韓国の方々の熱意と温かさにふれて A-07 小林 淑子

今回の訪韓ではどこへ行つても垂れ幕や日本語の資料や掲示が用意され、机上の名札やお茶菓子一つにも心を込めて下さっていることが伝わってきました。日本の静かなおもてなしとは少し違う熱い心配りに感激しました。訪問先での交流で、先生方の熱意やそれを支える行政の施策、自由学期制の様々なプログラムの中で将来の目標を見定め夢を語る中学生、地域の伝統文化を大切にしている吉州小学校での仮面踊りや文化授業で触れ合った明るく届屈のない小学生、温かく迎えてくださったホームビジット先のご家族など一つ一つに感動すると共に、グローバル人材の育成を目指して自己主導型学習や自由学期制など様々な改革を図りながらも、文化遺産や礼儀など伝統的なものを大切にしている韓国と日本は通じあうものがたくさんあること、近い国でありながら分かっていないこともたくさんあったことに気づきました。ESDやお互いの理解とつながりを広げていくために多くの人が様々な形で交流することが大切だと感じました。

●これからの活動予定

- ・養護教諭の研究会や特別支援教育コーディネーターの集まりでの情報共有
- ・生徒の交流・WEB会議

学校訪問で感じたこと

A-08 三橋 徹

学校訪問をして一番に感じたことは、授業のレベルの高さである。特に才能のある児童生徒に対して、さらに伸ばしていくような授業には興味をもった。日本ではとかく下の生徒に合わせた取り組みになることが多いが、もちろんそのことも大切なことだが、できる児童生徒に対してもしっかりと合った授業を展開することの大切さを学んだ気がする。

特別支援学校の見学では、まずは施設の規模に驚いた。私は日本で知的の特別支援学校に長く勤めていたが、実習先や仕事場がなかなか見つからないことがたびたびあった。学校で工場(働く場)を作ってしまえばいいのにと考えたこともあったが、そのことが現実になっていたので驚いた。また、先生たちの熱い思いを感じることができたので、当然のことだが改めて同じことを目指し

ている教師なんだと感じることができた。障害のある子どももない子どもも、当然だが同じで根本的なことを確認できたことも良かった。

●これからの活動予定

- ・校内でユネスコスクールをすることによる意義や利点を伝える
- ・韓国教職員の訪問受け入れ

「夢をかなえるために」

A-09 百田 明弘

参加の動機の1つが、「国際感覚を身につける教育」を学ぶことであった。泳熏国際中学校ではグローバルリーダー養成を目標に掲げ、「夢をかなえるためには挑戦すべきだ」という話があった。数学や科学を英語で行う教育課程、自己主導学習能力伸長のための研究課題やポートフォリオの蓄積等、具体的な取り組みがわかった。生徒との懇談会では直接、夢を聞くことができた。外交官や物理学者という立派な職業だけでなく、理由や動機を多くの大人の前で堂々と伝えられることが、この取り組みの成果なのだと感じた。次に吉州小学校で学んだことは、素晴らしい学校経営方針である。幸せな学校作りを目指して3つの目標を掲げて取り組んでいた。「生徒には夢がある」「教師にはプライドがある」「保護者には感動がある」。日頃、日本の学校で私自身が足りないと思うものを具体的な目標に掲げていた点に大変共感できた。そのために、学校の実態を分析し、施設・設備の改善、教員の研修の充実と教職員が一丸となって取り組んでいることを感じることができた。

●これからの活動予定

- ・校内外への情報共有
- ・手紙やEメールの交流

伝統を大切にする姿

A-10 森本 朝子

今回の研修で学んだことは、地域の文化を大切にするという地域に根ざした学校教育の大切さです。特に、訪問した安東市にある吉州小学校でそれを感じました。子どもたちが私たちを迎るために無形文化遺産にも登録されている「河回仮面踊り」を踊ってくれました。自

分たちの地域に伝わる伝統ある踊りを大切にしていることが分かりました。また、校内には、安東市の食材や昔から食べられている食べ物についての掲示物がありました。学校に通っている子どもたちにその食材のよさを伝えるとともに、それを家族、また他の人たちに忘れずに伝えてほしいう学校の思いを感じました。これこそが、持続可能な社会を作っている人材形成だと実感しました。

文化交流授業では、クイズや、日本語の挨拶を伝えたり、習字に親しんだりしました。どの子どもたちも興味をもち、積極的に参加していました。授業中も自分の日本語を聞いてほしいと来たり、韓国語でどんどん話しかけてきたりと、日本の子どもたちと変わらず、人が好きなのだと思います。この授業がきっかけとして、少しでも日本に興味をもち、さらに知りたいと思ってくれれば ESD としての価値がある授業ができたのではないかと思います。

● これからの活動予定

- ・外部の ESD 研修等への参加
- ・食文化の交流 (Skype など)

新たなる一步こそが…

A-11 森谷 亨

今回のプログラムでいろいろなことを経験させていただいた。学校訪問であれ、ホームビジットであれ、文化探訪であれ、そこでふれあう人々たちから受けるあたたかく優しいふれあいに何度も心を揺さぶられ、このプログラムの底流に流れる「心の交流」に気付かされた。

訪問先で出会った人々はもちろんのこと、自由時間に町で出会った人々までもが、私たちの言葉や行動で困っている様子を見て優しく接してくれた。日本の TV やインターネットなどから知る嫌日運動や政府と政府の対立などの情報すべてが少しずつ心の中から排除され、真実を見ようとする心の目が開かされた。するとどうだろう。多少の文化の違いなどは、日本国内でも北の北海道と南の沖縄とで違うように、日本と韓国の違いもその程度にしか感じられなくなつた。「文化の違い」よりも「似通う人間同士」というものの見方に気持ちが変化していった。同じアジア人として、いや、地球人として…

そう考えると、神様はなんと罪なことをされたものかと思う。お互いにわかりあえるように地球上の言葉を 1 つにしてくれたら、どんなによかったことか…。しかし、そこにこそ、何か大切なものがあるのかもしれない。言葉が

通じるか通じないかではなく、人として何が大切なのか試されているのかもしれない。日本に帰国した今、私は何を始めればよいのか、どうやって理解しあうようにすればいいのか、次に踏み出す新たな一步こそが、とても大切なものがあると考えている。

● これからの活動予定

- ・(生徒に向けて) 国際理解のための集会を開く
- ・「韓国」をテーマとした国際理解教育授業の実施

自分たちを見つめ直す のだ！

A-12 野田 裕行

「韓国教育の良いところを学んでこよう！」と強く想い訪韓した。しかし、安東の方々が自分たちの文化を大切にする姿を目の当たりにして、「もっと自分たち(日本)を見つめ直さなくては！」という想いに変容していた。日本と韓国、どちらの教育が良いか、進んでいるかではなく、どちらも自分たちらしく存在することが大切であることに気付いた。果たして日本人は、自国の文化に誇りをもっているだろうか。経済競争という波に飲み込まれて、自分を見失っていないだろうか。もう一度日本について、自らの地域について理解し、愛することを学習したい。

また、プログラムを通して、常に考えていたことは「主体性」という言葉であった。日本では、昨今「アクティヴ・ラーニング」が呼ばれるようになった。韓国では、「自由学期制」というキャリア教育を導入して、主体性を伸ばそうとしていた。しかし、その反面、規律やルールも多く確立されていた。正直、日本でも取り入れた方がよいのではないかと思うものもあった。そこから、その国の歴史や文化を考慮した上で、主体性を重んじるところと規律やルールを遵守しなくてはいけないところのバランスをとることが大切であるという考えに至った。現在の日本教育に合った「主体性」と「規律やルール」のバランスをもう一度考え、教育に当たらなくてはいけないと感じた。

● これからの活動予定

- ・全校集会での報告、および高学年の授業において、韓国やプログラムに関連する内容を取り入れた授業の実施(総合的な学習、道徳、社会科)

学校訪問 A-13 大場 一輝

小学校、中学校、特別支援学校への訪問は、韓国における教育事情を正しく把握するために、最も有効な手段であることを改めて感じることができた。その中で、理解できることとして、ここでは3点挙げたい。

1点目は、韓国のそれぞれの校種が、教育の進むべき道を正しく理解するとともに、すべての教職員がその道を共通に理解するための方策を具体的に講じていることである。

2点目は、情熱をもって、子どもたちへ教育活動を行っていることである。教育の具体を語る際の目は、極めて印象的であった。

3点目は、教育課題に関する日本との相違点である。韓国においても、課題解決の困難性に応じ、専門家の支援、諸機関との連携等、組織的な対応に意を用いていることである。

これらのことと、日本のより多くの教職員が共通に理解を進め、モチベーションを高くして、今後の教育活動の推進を図る必要があると考える。

●これからの活動予定

- ・校長会での情報共有
- ・外部関係団体への報告、共有

有意義な学校訪問 A-14 大野 正巳

ソウルの泳熏國際中学校、安東の吉州小学校・安東永明学校(特別支援学校)の学校訪問が特に印象的であった。日本のTVや新聞で入ってくる韓国の教育事情とは違った面を目の当たりにすることはとても有意義であった。ソウルの泳熏國際中学校で参観させていただいた授業は生徒が数学や化学の授業をネイティブスピーカーの先生から英語で受けていた。また、生徒は少グループに別れてディスカッションを行っていた。このことは、瞬時に自分の思考を他言語におきかえられる活動につながり、実践的な試みだと感じた。

安東の吉州小学校においては、文化交流授業を行わせていただいた。6年生で日本の食文化の授業を展開させていただいた。和食の話に熱心に耳を傾け、日本の給食と自分たちの給食を比べてその違いに驚いてい

た。また、韓国の箸と日本の箸の違いを体験してもらうために豆つかみをやってもらったがみんな上手に箸を使い、箸使いチャンピオンを決めていた。

安東永明学校(特別支援学校)においては、一貫した(幼・小・中・高)特別支援教育の在り方を学ばせていただくことができた。

●これからの活動予定

- ・韓国の教育事情、本プログラムやESDについての報告会
- ・市内ユネスコ協会への報告

現地の児童・生徒との関わり

A-15 坂本 尚毅

学校訪問が3回ありました。その中でも、児童・生徒と関わり合うことができた時間は、大変充実していたと感じます。私は、現在直接子どもたちを指導できる場所を離れていますが、元々は教員であるため、現地の教室で行われた授業での子どもたちとの関わり合い、国際中学校生徒との質疑応答、特別支援学校の児童・生徒たちが学ぶ姿、歓迎の演技や言葉などに深い感動を覚え、鮮明に記憶に残っています。

特に授業では、日本の先生の話や用意した資料に興味をもち、伝えようとしていることを一生懸命学び取ろうとする子どもたちの姿がありました。彼らの中には、「日本から先生が来て授業をしてくれた」というのが忘れられない思い出となって残っていくことでしょう。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向け、各学校では国際交流、国際理解の充実を図っていくことが求められていますが、それを指導する先生が国際交流の経験をしているかどうかで、充実度が違ってくるのではないかでしょうか。その意味でも、多くの先生が参加できることは、大変大きな意味があったと考えています。ありがとうございました。

●これからの活動予定

- ・市内の各学校でどのような取り組みができるか、情報交換会を行う

つながりから広がる人間力 A-16 柴田 芳作

韓国の自由学期制の導入や人性教育の推進は、不確定で不明確な時代に向かうための課題として、日本の教育でも重要な教育のテーマだった。今回訪問した学校からは、語り尽くせない多くのことを学んだが、特に ESD や GCED の理念を現場で実践していくことの意義が、子ども・教師・保護者／地域の関係の中で共通認識され実践されていること。訪問したどの学校からも新しい取り組みに挑戦していく姿勢と意気込みを享受できたことは大きな成果だった。また、担当させていただいた文化交流授業では、未来に向かって生きる、幸せに向かって歩む子どもたちの学びに向かう意欲と、何かをつくりだす時の期待感やつくる喜び、できたときの嬉しそうな笑顔が世界共通の子どもの姿として私の中に強く印象づけられるものとなった。創造性を重点化する韓国教育の転換は、どの国でも共有できる考え方だろう。例えば造形教育から生まれる個の表現が地域や社会へ伝わっていく大切さや、お互いの人間性を国際的な場面で表現していく関わりの重要性など、今回の教職員交流プログラムでは、韓国の教育現場から感じ取った「つながりから広がる人間力」を涵養していくように学校教育を推進させていきたいと自分自身の教育観を更新する有意義な機会となった。

●これからの活動予定

- ・研究会を通して、図画工作の教科の特性を生かし、ESD や GCED の理念や視点を学校教育に還元する方法を研究していきたい

相手を理解すること A-17 菅原 紗

過去の辛い歴史から反日感情を抱いていることを前提に、少し身構えていたのは事実である。しかし、このプログラムに参加し、両国の文化における共通点が非常に多く、人々の根底にある考え方と同じであることに感動を覚えた。だからこそ言葉の壁を乗り越え、お互いが思い合っていることを感じ取ることができ、短時間にもかかわらず絆が生まれたのではないかと感じた。お互いを理解するためには、言葉や文化の壁だけではなく、正し

い情報を知ろうと努力し、コミュニケーションをとる中で相手を許し、相手を受け入れ、相手を思いやることが大切だと改めて感じた。分かっていたつもりだが、実際にこの目で確かめたことは何にも勝るものだった。国際理解教育を進めていく中で、指導者としての意識が変化したことは大きな意味がある。

また、日本の良さについて再認識する機会となった。日本人の道徳性や地域コミュニティーなど、脈々と受け継がれてきた伝統的な文化を失うことがないよう、伝承していく必要があると強く感じた。

●これからの活動予定

- ・全校児童に向けて、写真や映像を使ったプログラムの報告
- ・韓国における ESD の取り組みを ESD カレンダーの制作に生かす

学校訪問とホームビジット A-18 菅谷 万紀

韓国の教育政策が、日本と似ているところがあるということを非常に感じた。日本も韓国も一斉授業などの詰め込み型から、自由学期制をはじめとした、思考の過程や自分の将来に対するキャリア教育、自分の地域の伝統を守っていくことを重視していることを学んだ。

吉州小学校では、日本人教員が授業を行ったことは非常に意義深いものとなった。サポートとして授業には参加したが、子どもたちの「生の声」や様子に触れることができ、子どもたちの様子は日本も韓国も同じなんだな、と感じるとともに、日本の文化を発信することもできた。

ホームビジットでは、スーパーに行ったり、日常生活を垣間見ることができた。ホームビジット先では、小学生や大学生のお子さんもあり、教科書を見せてもらったり、より近くで韓国の学生の話を聞くことができた。その他にも、韓国の家庭料理やゲームなど様々な文化に触れることができた。

●これからの活動予定

- ・韓国での学校訪問や文化について伝え、他国の文化とともに自国の文化についても考えるきっかけを作る
- ・Skype、絵手紙を通した交流

表現力の拡大

A-19 鈴木 文哉

本プログラムに参加して、教育に対する視点が広がった。韓国の様々な教育現場を見ることができ、今自分に足りないものやこれから日本がしていくなければならない教育が見えてきた。特別支援学校を訪れたときは職業訓練場の数や充実感に驚かされた。中学校では外国語を使って討論する姿に驚いた。グローバル化が進む世界の流れを感じた。他国とのつながりを持つためにも言葉は必要不可欠である。

今回の研修では言葉の壁と言葉を凌駕するコミュニケーション能力について学んだ。違う国新しい言葉を覚えるのはとても楽しいと感じた。教えてもらった言葉を使い相手に伝わると嬉しくなる。しかし、言葉の数が少なすぎてこちらが思っていることがなかなか伝わらないのはとても悔しい。

プログラムの中で授業ができ、とても大きな発見をした。言葉が伝わりにくいことがあったが、強い気持ちとjesusチャーチの活用で通じる部分もあった。これは一つのコミュニケーションツールであると再認識した。日本人は多くの言葉で言い回しができるが体を使ったjesusチャーチがとても少ない。声の抑揚も少ない。韓国の教育に倣って勉強だけでなく、自分の気持ちを相手に伝えようとする意識をもう少し高められるようにできたらよいと感じた。スマホを持っていないと不安になるのではなく、自分の気持ちが相手に伝わらないことが不安であると感じる心を育てていきたいと感じた。

●これからの活動予定

- ・展覧会や運動会などの、行事の絵や作文などの作品交流

相互理解の入り口

A-20 竹谷 正明

先進的な取り組みに圧倒された沐熏国際中学校。伝統文化とおもてなしに感銘を受けた吉州小学校。高い志に教育の原点を見る思いがした安東永明学校。以前はなんとなく韓国の教育は画一的なのではないかと思っていたが、少なくとも見た限りそうではなかった。日本の教育のあり方を見つめ直すよい機会となった。

ホームビジットで池先生ご夫婦と夕食を共にしながらの楽しい時間を通して、韓国の先生方の日常生活も垣間見ることができた。文化に違いはあるが、基本的な生活の様子にさほど違いはない。しかし、教育活動に見られた違いは大きい。その差はどこから来るのか考えていきたい。

日程も終わりにさしかかる頃、バスの中で通訳の方がおっしゃった言葉が忘れられない。「今回見たことは韓国的一部であって全体ではない。一部をもって全体を判断しないでほしい」。今回のプログラムでは多くのことを学んだが、今後とも韓国について進んで理解することと、日本についてしっかりと発信していくことが必要である。

●これからの活動予定

- ・韓国の教育活動への取り組み、ESD・GCEDについての情報を共有する

未来に何を求めるか

A-21 内田 敦子

ESDの考え方や取組について日本や韓国の動向を把握し、また、自身の教育方針についてもこれからの日本を背負う子どもたちに何を伝えていくべきなのか、指導する上で大切なことは何であるのか、今回の教育現場の視察等で考えを深めることができると期待していた。

今年度から始まった「自由学期制」では、生徒自身が将来の夢や目標もって自ら学ぼうとができるような取組を行っていた。社会や世界に通じる体験をすることは将来のことを考えるきっかけであるし、頭で考えるだけでなく体を通して学びを実感できることは、子どもたちにとって貴重な出来事だと思う。

安東地方では精神文化を継承していくとする教育方針に感心した。吉州小学校の子どもたちが披露してくれた伝統文化の踊りから、日々の教育の中で大人から子どもへと伝統が受け継がれている姿を見ることができた。日本において受け継ぐべきことは何かを考えさせられた。

今回の訪問では韓国のごく一部しか理解できていなかが、出会った人々の人の良さに触れ、今後はお互いの国を尊敬しつつ、良いところだけではなく課題点についても共有できるような関係を築いていきたいと感じた。また、日本の子どもたちに伝えるべきこと、大事にしてほしいことについて考えを深めることができた。

●これからの活動予定

- ・教職員を対象とした成果の報告、ESDに対する意識を高める

未来の人材をどう育てていくか
(心の教育も含めて)

A-22 梅澤 一久

「人材育成」こそは、日本と韓国が大切にすべき資源対策であると思う。韓国ではその人材育成への取組で、国を離れても郷土や国を愛しながら世界で羽ばたく人材を育むために、国を挙げて様々なカリキュラムを行い、教員を配置している感が伝わってきた。

また、人材こそ資源と考える両国はユネスコのESDの趣旨がぴたりとはまる国であると感じた。その意味でグローバル人材育成を目指し実践している学校の様子を見ることができたのはとてもよかったです。また、慶尚北道での教育庁訪問及び小学校訪問では、国の政策が全国へ伝えられていることが確認できた。ユネスコスクールである小学校では、地域の特性を生かして、地域遺産や伝統芸能を学校と地域・家庭が連携しながら学習及び体験活動を行っていることがわかった。

我々も地域を活かした学習や地域財産を再度見直して、より良い学習環境を整えていかなければ感じた。

●これからの活動予定

- ・地域の郷土遺産、文化遺産を学習プログラムに組み込む
- ・県内のユネスコスクール加盟推進



個別成果報告・B グループ

ESD の実践は「希望」と「未来」につながる

B-01 根本 明彦

本プログラムへの参加は日常的な現場を離れて教育に向き合う貴重な時間だった。若いころは生徒と共に過ごす時間そのものが楽しくてしょうがなかった。それなりの年をとると生徒は私たちの「希望」であり「未来」であると感じ始めていた。そして今回のような機会を得て、「教育」という仕事が国の「希望」であり、国の「未来」につながる大切な国家事業であることを改めて考えることになった。

韓国の教育への取り組みはダイナミックだった。生徒のまなざしは穏やかで元気、先生方も実に熱心だった。私たちは良い学校を作り、良い教育をしたいといつも考えている。しかし、韓国の生徒や先生たちのように伸びやかだろうか?と振り返ってみる。こうして他国の教育現場を拝見すると、ますます血が騒ぎ出してしまう自分がいる。韓国の先生方やスタッフの皆さんのご親切を忘れることができないし、ESD の推進にあたり多くの事を学ばせていただいた。そして、全国から集結した先生方が実に魅力的だったことに大変な喜びを感じている。こうして私たちが ESD の虜になっていくのだなあと一人頷く。

●これからの活動予定

- ・プログラム日程中、学校のネット掲示板に「韓国通信」を発信し、校内で大きい反響があった。これをきっかけとし、国際理解事業を推進していくたい。

出会うことのすばらしさ

B-02 福井 宏和

今回のプログラムで何よりも、刺激的だったことは、学校訪問で、韓国の生徒や教職員の方々とお話をできたことです。韓国についてはじめに、今韓国の学校では、何に取り組んでいるかの説明を受けました。実際に現場にいって、授業を見たり、実践していることの報告を直接聞くうちに、現場での成果と課題を詳しく知ることができました。特に韓国でも、知識を詰め込むのではなく、自分の

頭で考え、行動する人を育てる教育のために、先生方が試行錯誤していることがわかり、自分の学校においても、生かせることや、応用できるところなどが見つかり、大変勉強になりました。また、自由学期制(テストの内容や期間にとらわれず、ある一定期間、それぞれの学校が独自のプログラムを組んで、生徒に考える力や実践をさせたりする時間を設けること)を、積極的に取り入れたり、生徒に自分の考えをまとめて、プレゼンせる機会を設けていることなど、生徒の才能を引き出すために、やれることはまだまだたくさんあるという実感を持ちました。今回の韓国訪問が、私の中でたくさんの発見に満ちていたのは、やはり直接の自分の目で見て、考え、人と出会う機会を設けてくださったからだと思います。

●これからの活動予定

- ・自由学期制を参考に、短期間でも生徒の実態に応じたプログラムを用意したい。

持続可能なパートナーシップ構築を促進する日韓教育交流

B-03 羽田 真

本プログラムでは多くの貴重な体験ができたが、その中でも日本文化紹介授業は最も有意義であった。他の参加者と協力して準備を重ね、実践が成功したことは大きな喜びでもあった。韓国の中学生の姿を想像しながら指導案を作成したが、彼らは予想以上に日本への関心が高く、知識もあることを知り、日本の国際理解教育の改善の必要性を痛感することができた。

韓国は日本にとって重要な隣国であり、今後一層のパートナーシップを構築することが両国にとって重要である。歴史認識の問題にからむ政治的な軋轢を乗り越え、両国が友好をはぐくみ、東アジア地域に平和と安定をもたらすために、まず両国の市民レベルで対話によって理解を深める方策が促進される必要がある。韓国における先端的な ESD の実践や教職員交流から学んだことを持ち帰り、今後の交流深化につなげることが重要である。韓国教職員の日本招へいも含め、本プログラムの今後の継続を強く期待する。

●これからの活動予定

- ・プログラム初日の晩餐会で知り合ったガオン高校とのオンライン学習交流
- ・韓国の事例を参考に、模擬国連の取り組みを授業内で展開する

**直に体験することが理解への第一歩
B-04 細田 理絵**

韓国を訪問して私が一番感じたことは、韓国の方々の温かさです。韓国を訪れるまでは、韓国と日本の間には深い溝があると漠然と感じていました。それは、ニュース報道で見聞きする韓国の人々の反日感情や日本で行われるヘイトスピーチの問題などから感じるものでした。

しかし、今回のプログラムで出会った韓国の方々は、心から私たちを迎えてくださいました。また、訪問先で出会った多くの生徒たちも、とても好意的に笑顔で接してくれたことが印象的でした。特にホームビギットでは、温かい韓国の家庭料理でもてなしていただき、本当に楽しいひと時を過ごさせていただきました。

日本と韓国の中には歴史的な背景があつて、それは決して忘れてはいけない事であり、これからも考えいかなければならないことに変わりありません。しかし、韓国に足を運び、韓国の文化に触れ、韓国の方々と接することで、私たちは韓国を身近に感じ、韓国の方々と友好的な関係を築くことができました。

このプログラムを通して、韓国の文化や教育について多くのことを学びましたが、一番の収穫は韓国の方々とつながれたことです。この出会いをここだけで終わらせるのではなく、広げていくことが私たちの役目であると感じています。

●これからの活動予定

- ・韓国のユネスコスクールの取り組みを校内に周知、今後の取り組み方を考えるきっかけ作り
- ・給食の残菜を減らす取り組みに ESD の視点を取り入れる

国際理解教育(EIU)と持続可能な開発のための教育(ESD)**B-05 梶 泰三**

私は EIU に関心があり、これまで自らの体験を基にした教材を作成して EIU に取り組んできました。生徒が自分自身の学びとして捉えられる EIU が、私の目標です。

管見の限りですが、ESD は EIU や環境教育などの種々の内容を包括する概念であり、持続可能な社会を創造するための教育だと理解をしています。ESD の包括的な概念を取り入れることで、EIU を生徒の学びにしたい。それらが、本プログラムへの参加動機です。

仁川陽村中学校では「実践する世界市民として活動できる。」ことを目標に、ESD をテーマとして実践中心主題統合融合ブロック授業が行われています。同校の先生方によると、知識だけはない実践に繋がる融合ブロック授業は、教師の協力により実践可能となるそうです。またアンケートから、融合ブロック授業により生徒が良い方向に変容していることが明らかになったそうです。仁川陽村中学校での融合ブロック授業を参考にすることで、自分自身の学びとして捉えられる EIU を実践できると考えています。

●これからの活動予定

- ・韓国に関する国際理解教育の教材作成
- ・市の教育委員会に、教育体験記録としてプログラムについて投稿・周知する

学校教育で何をするか**B-06 金田 亜妃子**

今回の訪問は、韓国の現在の教育目標を知ること、現場を見て感じてること、現在の韓国に暮らす人々の日常を知ったり、生身の人間同士の関係を作ることなどを目標・目的に臨んだ。様々な学校を訪問する中で、どの学校もより良い学びの環境が整えられていると感じた。また、国際感覚を身に付けさせることや、学びの中に探求的・創造的なプロセスを組み込み、自ら考え・学ぶことができる教育へ変わりつつあるということも分かった。韓国の教育目標、教育現場を見させてもらう中で、同時に自分の学校での自分の取り組みがどうであったかを常に考えていた。学校を出た後の世界を見据えつつ、今学校で何をするべきなのか、できるのか、生徒にとって必

要なことは何なのかを再考するチャンスを与えてもらつたように思う。教員自身が視野を広げ、その中からやるべきことを見出し、世の中の変化とともに変わっていけるよう努力したいと思えた。

●これからの活動予定

- ・授業を通して、今回のプログラムでの経験や韓国の学校生活を伝える

出会いの大切さ、地球市民教育はお互いを知ることから

B-07 川島 勇行

今回のプログラムに参加するまでは、韓国の教育事情はもちろんのこと、ESD や GCED についてもほとんど理解していない状態でのスタートだった。しかし、成田で始まったオリエンテーションからの密度の濃い 7泊 8日の日韓交流プログラムは今までの私の教員人生のなかで大きなインパクトを受けたとともに貴重な財産となつた。

このプログラムを経験して得たものは何だろうか。受験競争偏重から転換を図ろうとしている韓国教育の課題と取り組み。そのなかで ESD や GCED を取り入れ、環境問題などのグローバルイシューをテーマに国際理解教育や平和教育をすすめていること。興味関心を持たせるために学力評価を行わない自由学期制を行ったり、そのための教材開発をしている韓国の先生方との教育談義。そして、日本文化に興味を持ち、日本語を学んでいるアニメ好きの高校生たちとの交流。また、日本文化体験授業の教材作成を通して自分たちからの日本文化の発信。そしてこのプログラムに参加された日本の学校の先生たちとの交流…。どれも勉強になり、ワクワクさせられた。

今回のプログラムを通して多くの人と新たに会えた。これらひとつひとつの出会いが自分のなかの文化理解や多面的な思考に大きな影響を与えた。少し大げさな言い方かもしれないが、同じ地球上に暮らす者として共通点や違いを受け入れ、その先にある平和な世の中の構築に向けて、今自分がいる現場でできることを考え、目の前の生徒はもちろん、お世話になった韓国の先生や生徒たちに返せることをしていきたいと考える。

●これからの活動予定

- ・韓国の学校や文化、社会問題について生徒に伝え、興味を喚起しながら国境を越えた取り組みについて考えさせる
- ・全国地理教育研究会の研究紀要にプログラムについて投稿する

より良い世界を目指して

B-08 小林 美帆

今回のプログラムで、4つの学校見学をさせていただき、今後どのような教育が求められるのかを考えることができた。今、世界は、経済や貧困、テロの問題など、数えきれないほどの問題を抱えている。また、たくさんの情報があふれかえっている。このような状況の中で、これらの子どもたちが幸せな未来を築くためには、どのような学びが必要になるのか。まさにそれが ESD であると実感した。これからは、たくさんある情報の中から、何が大切で何が間違っているのか、自分で判断して行動する力が必要ではないかと思う。そのような力を身につけるため、教科横断的な学習活動を実践とともに、学習者を中心とした主体的な学びを考えていきたい。また、英語科の教師として、語学を学ぶ大切さを生徒に伝えていきたいと改めて思った。語学は、道具にすぎない。語学を身につけて、初めてできることがたくさんある。語学を身につけた先のことを目の前の生徒に伝えていきたいと思う。そして、「他人とのつながり」を尊重できる人を育んでいきたいと思う。

●これからの活動予定

- ・韓国の学校で実施されていた、英語学習におけるリーディング・ライティング活動を授業で取り入れる
- ・生徒同士の、英語を使った Skype 交流

韓国の生徒から学んだこと

B-09 久保木 納美

生徒との交流で「韓国の生徒は日本のことこんなかんに勉強していますが、日本人は韓国のこと勉強しているのですか?」と日本語で質問をされた。日本人が勉強しているか以前に、自分が韓国に対して無知であることを恥ずかしく思った。この生徒は将来のことを見据えると

もに、生活の中に「日本」が当たり前のように存在していると感じた。この生徒以外にも、日本語を流暢に話す生徒が多く、生徒の意欲と能力の高さに感心した。生徒は日本のアニメや漫画から日本語を覚えたと言っていたが、勉強させられているのではなく、自ら「知りたい」「できるようになりたい」と思ったことは、確実に身に付くと再確認することができた。日本の教育や学校生活の中でも、生徒の可能性を信じ、挑戦する機会を設定することが大切であると感じた。

●これからの活動予定

- ・ESD や地球市民教育の視点を盛り込んだ授業の提案

日本との交流に熱心な韓国の教育現場

B-10 宮坂 武志

今回の訪問校はソウルと仁川の計 4 校でしたが、どこでも熱烈な歓迎を受けたのが印象的でした。私は世界史を担当していますから、正直日韓関係は教育レベルで分かりあうのが難しいのではないかと身構えていましたが、まったくの誤解と思い込みであったと痛感させられました。歴史的なことよりも、現在の両国の教育上の問題が非常に共通していて、人材を育成するという観点から両国の教育現場が抱えている課題に大差がないことを知ったのが大きな収穫でした。大学受験競争の過熱による中高生の心の問題、経済格差による学力低下の問題、いじめや不登校などネガティブなことはもちろん、グローバル教育(なかでも ESD と GCED) や環境教育、進路教育などポジティブなものまで、話し合うべきテーマは豊富にありました。お互い教育に携わる者として、国家の壁を越えて理解し合い、協力し合いながらさまざまな解決策を探っていくなくてはならないということを認識させられた 1 週間でした。また、ホームビジットも短時間でしたが、プライベートな時間を共有しながら、教育の問題を熱く語れる貴重な機会だったと思います。なお、わずかな自由時間がありますが、街中で出会った日本語を学ぶ大学生に偶然話しかけたのが縁で、釜山のガイドを引き受けでもらいました。こんなエピソードも旅の醍醐味であり、かつ日本に興味のある若者が韓国に多くいるとの証ではないかと思います。

●これからの活動予定

- ・勤務校のグローバル教育への活用検討
- ・地球市民教育や自由学期制を参考に、活用できる部分を授業に取り入れたい

「国と国」から、「地方と地方」、「学校と学校」、「人と人」の交流へ

B-11 中村 弘子

「韓国政府日本教職員招へいプログラム」という名称からして、本プログラムへの参加は、日本国を代表するという責務を担わされているような重々しさがあり、学校を代表して申し込みはしたもの、正直、不安ばかりが募る日々を送っていた。韓國の中学生に「日本文化を伝える授業」と言われても、尻込みしてなかなか手を挙げられずにいたところ、同じグループの先生方が、授業案を次々にメールで呼びかけ、「自分の地方にある伝統的なお祭りの紹介をしたい」と目にはした時には、私も心が躍る思いだった。自分の住む長野県、北信濃の PR だったら題材に事欠かないし、伝えたいものは山ほどある。「授業を通じて、韓国ではまだ知られていない日本の地方を紹介する」つもりでこのプログラムへの参加の手を挙げたかったというのが正直な感想だ。韓国に行かせていただいた、韓国人と日本人は儒教に根ざす伝統的な価値観で、共感できる部分が沢山あることを実感した。本当に韓日両国はよき隣人になり得ると確信が持てた。だからこそ、政治的な動きに翻弄されることなくよりよい関係を築き続けるために、このプログラムが「地方と地方」「学校と学校」「人と人」を繋ぐプロジェクトに発展してくれるこど願っている。

●これからの活動予定

- ・生徒、教職員それぞれに向けた報告
- ・地域の外国語版リーフレット作成の働きかけ

韓国教育事情を肌で感じて

B-12 西山 直子

本プログラム参加前、韓国の教育事情について知っていることといえば、熾烈な入試、優秀な大学を卒業しても就職先を見つけることが困難な社会状況くらいであった。本プログラムを通して、教育現場の率直な生の声

を聞くことができたことが、私の中で一番学ぶことの多かった内容であった。社会的な状況が似ていることもあり、課題や解決策としての指導法など共通する内容が多くみられ、その具体的な取り組みは大変勉強になった。特に、ESDや地球市民教育については、生徒の学力に合わせて工夫された取り組みがなされていること、今日的な世界の課題が教科の内容にうまく取り入れて指導されていることを拝見し、今後の自らの教科指導の在り方を考え直す良い機会となった。

今回は、中学校、高校の訪問をさせていただいたが、小学校からの連続した教育活動の流れを知る機会があればよかったです。特に、小学校の英語教育を見学してみたかった。

●これからの活動予定

- ・勤務校、研修会などで情報共有を行う
- ・工業高校という特性から、生徒が作るもののは常に世界と繋がっているという意識を持たせる授業作り

「つながる」って素晴らしい！

B-13 野村 直美

本プログラムでは「つながる」ことの大切さを学んだ。1つは、我々参加者と韓国の先生方や生徒たちとのつながりである。初めての訪韓ということもあり、韓国の人々や教育現場に、とにかく体当たりでぶつかっていこう、という意気込みで参加した。受け入れ側の韓国ユネスコ国内委員会、仁川広域市教育庁をはじめ訪問先の先生方は、そんな私の期待に十分すぎるほど応え、現場の実態を包み隠さず見せていただいた。生徒たちも人なつっこい笑顔と日本語の挨拶で迎えてくれた。視察や意見交換を通して日韓の教育現場が持つ本質が同じであること、生徒の将来そして国の未来を想う教師の心に違いないのだということを実感した。もう1つの「つながり」は本プログラム参加者同士の輪である。文化授業に関しては、先生方と1ヶ月前から互いに意見を出し合って準備し、プログラム中は移動中のバスの中でも時を惜しんで語り合う一体感が生まれた。この2つの「つながり」は私の財産であり、これを今後、私の周りにも広く大きく「つなげ」ていこうと思う。

●これからの活動予定

- ・県の「小学校社会科研修」でプログラムや韓国の教育、ESDについてのプレゼンテーション（実施済み）
- ・韓国の学術機関との学術交流を検討したい

出会い・発見・感謝

B-14 大久保 聖子

今回のプログラムに参加させて頂き、多くの出会い・発見がありました。参加するまでは、私の中では韓国は、かつて日本に沢山の文化をもたらしてくれた恩人の国であるという認識だけで近いけどよくわからない国でした。今回、参加してみて、どの学校も生徒・教職員あげて胸襟を開いて歓迎してくれるその真心に感動しました。また、韓国の未来である生徒と日本語での懇談、教職員と教育交流懇談することで、韓国の教育と日本の教育の共通点や違いに気づくことができました。自由学期制、ESD、GCEDに取り組むことを通じて、学校が同じ方向に向かっていることもよくわかりました。その他、ホームビジットでの体験・韓服の試着・宮中チムタク作りなど今後の私の授業にすぐに役立つ発見もあり、楽しいひとときとなりました。

●これからの活動予定

- ・家庭科の授業で韓国について取り上げる（世界の料理講座、伝統衣装の違いを学ぶ）
- ・ユネスコスクール活動として周知

推進力

B-15 尾崎 さおり

国際教育交流事業に参加させて頂き、沢山のエネルギーをもらいました。物事の本質を捉え判断をするためには、現状だけでなく過去を振り返り他と比べることや、より良いものを作るために、仲間と話し合い決まったことは全力で向かっていくことが大切だということを韓国の教育に触れ改めに実感しました。

英語教員との交流会では、韓国の英語教育の推進を感じました。幼稚園から英語のプログラムを入れている所が多く、英語に出会いインプットの段階は、ネイティ

の先生から指導を、小学校ではアルファベットを書くことやフォニックスなども行うので、中学入学の段階では、アウトプットを中心に授業が行われている様でした。高校の定期考査の問題は、大学受験を意識し多読が必要な TOEIC 形式の問題で構成されておりました。小中高の連携はあまり行われていない様でしたが、必要な力をそれぞれの学年で身につけ、韓国の学生が確実に英語力をつけていた様子がよく分かりました。また、働きやすい職場の環境を作っていくことで、教育が活性化することも改めて実感しました。この研修で学んだことをエネルギーに変え、市の教育を推し進めていきたいと思います。

●これからの活動予定

- ・訪問校で実施されていた地球市民教育の教科融合型の実践を紹介・周知
- ・国際交流の中に ESD の視点を取り入れる

日韓両国から発信する新たな教育

B-16 佐倉 傲

今回のプログラムで強く印象に残っていることは、韓国の学校を訪問させていただき、授業の実際を参観させていただいたり、先生方や生徒の皆さんと直接話をさせていただいたり、文化授業などを通して生徒の皆さんと触れ合わせていただいたりして、国は違ってもやはり学校は同じということを感じたことであった。先生方が課題と感じている点、生徒たちが頑張りたいと思っている点、先生方が伸ばしたいと思っている生徒の姿など、多くの共通点を感じた。具体的には、自由学期制を通して、生徒に自らの生き方を考えさせたり、探究力を付けさせたりしようとする取組は、日本でも次期学習指導要領改訂に向けて課題となっている部分であると思う。今回のプログラムを通して、日韓両国が同様な課題をもち、その課題に対して様々な取組をしていることが分かったので、是非、教職員・学校レベルで両国の取組を共有し、両国から新たな教育を発信していくけるようなければ、とスケールの大きいことを考えた。

●これからの活動予定

- ・プログラムの紹介、ユネスコスクール活動の推進

「心の交流」国際理解教育

B-17 佐山 好英

プログラムを通して、日本と韓国の教育の共通点や相違点を学ぶことができた。本校ではオリンピック・パラリンピック教育担当として、国際理解教育の大切さは意識していましたが、実際に韓国を訪問したことで、本当の意味で実感することができた。韓国の高校生との交流会では、生徒の流暢な日本語に驚かされ、日本のアニメや文化のことを楽しそうに語る姿を見て、うれしい気持ちになった。逆に、韓国の文化のすばらしさについて生徒に語ると、生徒は誇らしげに話を聞いた。自分の国を褒めてもらうということは大変喜ばしいことである。互いの国を理解し、互いの良さを共有することこそが国際理解教育の醍醐味だと思う。また、各学校や教育機関、ホームビジット先のご家庭からは心からの歓迎と「おもてなし」をしていただいた。「おもてなし」は日本が誇れる他者への気遣いであるが、まだまだ韓国の方々には及ばないと感じている。

国際理解教育とは頭で考えるものではなく、心で感じとるものであることを今回の訪問で学ぶことができた。私が体験した感動を日本の子どもたちにも心で感じとってほしい。また、その機会の場を設けることが私の役目である。

●これからの活動予定

- ・勤務校、区の教育研究会でプログラムの報告を行う
- ・図書室に国際理解教育コーナーを新設する

輝く瞳に心打たれて

B-18 滝谷 瑞江

韓国の教育事情を知るまたとない機会を得て、見るもの聞くもの全てが新鮮でした。キラキラと輝く瞳で生き生きと学校生活を送る学生たちの姿は、特に印象深く残っています。日本の学生とは明らかに何かが違っていました。国民性や学校の特性はあるとしても、本当に学校を楽しんでいる様子にただただ感銘を受けました。そんな中、学校訪問を重ねていくうちに共通して見えてきたものに「世界を見据えたグローバル教育」があげられます。そこからは自国に対する愛国心や誇りを大切にし、それ

を胸に世界に飛び立とうとする韓国という国の力強さを感じました。国が違えば教育方法や施策が違うのは当然ですが、未来を生きる子どもたちを育てることは同じです。自分、自國のことだけ考えるのではなく、同じ地球人としてどう生きていくべきなのかを教えることが大事なのだと強く感じ、本プログラムから大きな宿題をもらったようです。貴重な1週間でした。カムサハムニダ！

●これからの活動予定

- ・プログラムの周知
- ・ESD、GCEDの紹介

隣国から学ぶ

B-19 新長 太

今回は、教育府訪問を始め、中高の学校訪問や教職員及び生徒との交流等、非常に実りの多い有意義な時間であった。学んだことを、次の2点で集約したい。

1点目は、自分とは異なる他者に関心を持ち、知ることの重要性である。出発前、金澤団長が、社会は人ととのつながりで構成されていると言わされたが、まさに身をもってそれを体験した。特に、現代の国際社会では国境を越え活動する地球市民が求められている。韓国の場合、日本や中国との緊密な関係性はもちろん、アフリカや東南アジアとの交流にも注力しており、学校現場の取り組みから視野の広さを感じた。

2点目は、時代の変化に対する対処の早さである。ダイナミックで新しいことに挑戦し、仮に失敗しても再挑戦する懐の深さがある。自由学期制の導入はその最たる例であろう。ある高校の校長が、今後、国数英は主要教科ではないと言われたのは印象的である。早期英語教育やICTの導入等においてもそうであった。国際社会では、考えながら動くこの方法に私たちは学ぶべきことがあるかもしれない。

最後に、GCEDやユネスコスクールについて学んだことは多い。私自身、地域と連携した協働的な学びについて深く考え、失敗を恐れず少しづつ実践していくたい。

●これからの活動予定

- ・授業において、SDGsの視点を持ち、環境問題や異文化理解の単元と関連付けて韓国での取り組みや学校生活を紹介する

私と韓国から私たちの韓国へ

B-20 橋 隼人

本プログラムでは、韓国の自由学期制度やICT、強化横断型の授業など、先進的な教育現場を視察することができた。プログラムの中で最も有意義であった事は、韓国の方々とたくさんの考えを共有したことである。研修中に日韓の先生方と地球市民教育について議論する時間があった。地球市民教育は、環境や平和、貧困や社会情勢などテーマは多岐にわたり、私は漠然と捉えていた。しかし、対話を通して、GCEDの基礎となる考えに気づかされた。それは、「私」を主語としてではなく、「私たち」を主語として世界の問題を受け取ることである。プログラム参加前は、受験競争が激しい隣国であった。しかし今は違う。韓国にも受験のための詰め込み教育ではなく、生徒主体の学びを追求する教員の方がいらした。数時間しか時間を共有していないにも関わらず、自分を家族のように向かいいってくれたホームビジット先の皆さん。見ぶり手振りばかりの文化授業を一生懸命聞いてくれた生徒。今回の訪問で大切にしたい人々との出会いがあった。今の私にとって韓国は、とても近い存在になった。今回できた繋がりを大切にし、今後世界に広がっていくような活動をしたい。

●これからの活動予定

- ・英語のレシテーションコンテストで、日韓の教育を題材として発表する
- ・Skypeやメールを通した交流

韓国での出会いを大切に

B-22 山崎 秀規

本やインターネット等で得たい情報を簡単に得ることはできますが、実際に見聞き、体験することで得られるることはそれとは代え難いものです。特にこのプログラムは生徒・先生方と交流できる点が特に素晴らしいと感じました。たとえ数十人、数人いう一部の人だとしても、人と出

会いお互いの意思を疎通させて話しかけることは、国際理解の上では大切なことであると思いますし、何より面白いことです。

今回ホームビジットの体験をさせていただきました。たどたどしい日本語と英語を交えての交流で、お互いにある程度の意思疎通ができたことや、生活の様子を拝見できたり、料理・学校のことなどを中心に交流ができたことを嬉しく思います。外国人との交流になれていらっしゃるとはいえ、日本にとても興味を持っていらっしゃる点や、恐縮してしまうほどの親切で厚いおもてなしに、自分自身がここまで他者をもてなし交流できるのかを考えさせられました。

●これからの活動予定

- ・世界地理の分野で韓国の文化、学校生活を紹介し、韓国の同世代を日本でもてなすことについて考えさせる。



随行者のコメント

国際連合大学

サステイナビリティ高等研究所

事務局長 古田 知美

「発展途上国に物資を送る行為も持続可能な開発のための教育(ESD)の1つだが、例えば、なぜその物資が必要なのか、その背景をデータを用いて専門的・客観的に分析することも大切ではないか。高校生のできる ESD とは何かをもっと考えたい」と参加者の先生の1人が伝えてくださいました。今回は、日韓の関係者の多大なるご協力のもと、教育機関の見学、教職員や生徒との交流、授業体験など充実した訪問となりました。これらの体験を通じて、韓国の教育・文化を学び、友好関係を深めたばかりではなく、日本の教育の在り方を改めて考えられて、折に触れてご議論されていた先生方の姿が印象的でした。先生方の熱意とご努力で、一層実りの多い訪問となつたことと思います。今後とも、この事業が日本と韓国の教育交流の推進に繋がっていくことを期待しています。

文部科学省 国際統括官付

ユネスコ振興推進係長 岡本 彩

今回の訪問は、特色ある地域や学校、教育文化関連機関を見て学ぶ機会に恵まれ、教育課程や制度など、日本と韓国の相違について触れるたびに、好奇心がくすぐられ、また次から次へと生まれる疑問と向き合いながら過ごす1週間となりました。多文化共生や国際理解教育に限ったことではないですが、隣国にいる私たちだからこそできる地球市民教育(GCED)があり、さらには、地球規模課題を意識して未来を考える ESD が果たす役割は大きいはずです。各国それぞれの背景や国民性、価値観がありますが、それを踏まえて、多様な教育方法や教育内容を通じて共に学び合うことがとても大切なだと改めて実感しました。

ACCU 人物交流部部長 進藤 由美

韓国への訪問は大変学びの多い1週間でした。一参加者として、本来の目的である①韓国教育事情及び GCED と ESD の理解、②日韓教員間のネットワークの強化、③日韓両国の相互理解及び友好増進が達成されたことはもとより、ACCU からの随行者の1人として、ユネスコ韓国委員会(KNCU)の皆さまの大変手厚くまた心のこもった事業運営を拝見させて頂きました。今後の日本側の事業運営についても多くの示唆を頂いたと思っております。それにしてもタイトなスケジュールであるにも関わらず、教職員の皆さまは学びに対して、大変積極的な姿勢で、まさにアクティブ・ラーニングを実践されていらっしゃいました。

ACCU 人物交流部 斎藤 盛午

今年も韓国の英語教育のレベルの高さや ICT 機器を使いこなし授業を行う教職員の姿に驚かされました。また、毎年、日本教職員が現地にて授業を行いますが、特に印象深かったのはスカイプによる日本の学校との中継授業を行ったクラスでした。準備段階では通信環境をはじめ多くの課題がありましたが、授業は大成功で終わりました。日韓の教室がつながった瞬間の子どもたちの目の輝き、画面越しに絶えず質問を投げかける好奇心あふれる姿は忘れることができません。本プログラムではたくさんの先生同士のつながりが生まれますが、先生のつながりから子どものつながりが生まれる瞬間に立ち会えたことを非常にうれしく思いました。

ACCU 人物交流部 高松 彩乃

初日に行われた歓迎晚餐会では、ご挨拶をされたすべての方が、必ずお互いの言語でひとこと以上挨拶をされていました。乾杯の発声も、日韓両言語で「乾杯、コンベー！」。かしこまったく空気が一気に和みました。今回も実りの多いプログラムになりそうだな、と感じた瞬間です。本プログラムは、日韓の教育交流を通して相互理解を深め、良好な関係を築く第一歩とすることを目指しています。教育をキーワードに様々な場所を訪れ、たくさんの方々との出会いがありました。この出会い、そして互いに言葉の通じないなかでも「乾杯、コンベー」と言い合ったときの「感じ」を忘れずに、ここで生まれた交流が長く続くことを心から願っています。

◆資料 1.

韓国政府日本教職員招へいプログラム

(2016 年 7 月 12 日～7 月 18 日：韓国／ソウル、慶尚北道・仁川、釜山)

実 施 要 項

1. 背景

2000 年 3 月、戦後の文部大臣として初めて、中曾根弘文文部大臣(当時)が訪韓し、文龍鱗(ムン・ヨンリン)韓国教育部長官(当時)との会談でなされた招請に基づき、文部科学省の協力のもと、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)は、2001 年より韓国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施してきました。当初は「ACCU・ユネスコ青年交流信託基金事業」として、2003 年からは「ACCU 国際教育交流事業」として国際連合大学の委託を受け、これまで 1,877 名の韓国教職員が日本を訪問し、我が国の教職員との交流を深め、日韓両国間の相互理解と友好の促進に貢献してきました。

2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 10 名程度の日本教職員を韓国へ派遣してきましたが、これら交流事業の成果が韓国政府に高く評価されることとなり、2005 年からは、韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)による招へいプログラムとして参加人数を 20 名へ倍増し日韓教職員相互交流が実施されました。2008 年のプログラムからは、招へい人数がさらに倍増され、さらなる交流の発展を目指すこととなりました。

2. 目的

- (1) 韓国の初等中等教育における教育制度および教育課題への理解を深める。
- (2) 韓国における持続可能な開発のための教育(ESD)と地球市民教育(GCED)などの好事例を探る。
- (3) 教育経験を交換する機会を提供し、日韓両国の教育の質を高める。
- (4) 日韓教職員のネットワーク構築・強化に寄与する

3. 活動内容

- (1) 小・中・高・特別支援学校や教育施設訪問を通じて、持続可能な開発のための教育(ESD)や地球市民教育(GCED)を含む韓国の最新の教育政策・現状の観察
- (2) 訪問先における韓国の教職員・児童生徒との交流、日本の文化や ESD の紹介
- (3) 世界遺産見学やホームビジットを通じた、韓国文化の理解

4. 日程概要

出発前オリエンテーション：2016 年 7 月 11 日(月)

プログラム実施期間：2016 年 7 月 12 日(火)～7 月 18 日(月) (7 日間)

日付	日程	訪問先	活動
7 月 11 日(月)	前日	東京近郊	出発前オリエンテーション
7 月 12 日(火)	派遣第 1 日目	東京/ソウル	ソウル到着、韓国現地オリエンテーション 開会式、韓国の教育制度紹介、歓迎晩餐会
7 月 13 日(水)	派遣第 2 日目	ソウル	ユネスコスクール訪問
7 月 14 日(木)	派遣第 3 日目	キヨンサンブタド 慶尚北道 ・仁川	教育庁・ユネスコスクール・教育施設等訪問
7 月 15 日(金)	派遣第 4 日目		韓国教職員・児童生徒との交流、歓迎晩餐会
7 月 16 日(土)	派遣第 5 日目		地域遺産訪問、情報共有会、ホームビジット

7月17日(日)	派遣第6日目	釜山	報告会、閉会式
7月18日(月)	派遣第7日目	釜山/日本	釜山出発、帰国(東京／大阪／福岡へ)

5. 参加者

下記の教職員、随行員併せて50名を参加者とする。

- (1) 2015-2016年韓国教職員招へいプログラム受入れ教育委員会または受入れ校が推薦する教職員
- (2) 2016-2017年韓国教職員招へいプログラム受入れ予定の教育委員会が推薦する教職員
- (3) 公募により選抜された教職員
- (4) 国際連合大学、日本ユネスコ国内委員会を含む文部科学省、およびACCUの職員

6. 参加資格

- (1) 日本国民であること。
- (2) 所属する教育長・校長等から推薦を受けた、初等中等教育教職員(教育行政職員を含む)であること。特に、在職3年～15年程度の教員が望ましい。
- (3) ユネスコスクール、ESD、GCEDの活動に携わっている者、または高い関心を持っている者が望ましい。
- (4) 将来にわたり韓国との具体的な教育交流の推進に寄与できること。特に、韓国との学校／教職員／児童生徒／地域間の各交流、または定期的な情報交換等を推進する立場にある者が望ましい。
- (5) 健康で、オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
- (6) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的に参加ができること。
- (7) Eメールを用いて円滑に連絡ができる。また、Microsoft Word/Microsoft Excelなどの簡単な操作ができ、所定のフォーマットに必要情報を入力し提出できること。
- (8) 過去の本プログラムに参加がないこと。

7. 評価と報告

- (1) 派遣期間中
 - 評価票記入(日本語または英語で記入し、ACCUを通してKNCUへ提出。)
 - 情報共有会(日本側参加者のみによる)でのプログラムの振り返り。
 - 韓国教職員を交えての報告会への出席・グループ毎の発表。

(2) 帰国後

- ① 参加者は帰国後、所定の報告用紙によりACCUに報告書(日本語)を2回提出する。

		内容
第1回	2016年7月29日(金)12:00	主にプログラム中の成果について報告。 ※ACCUが発行する実施報告書へ掲載予定。
第2回	2017年1月27日(金)12:00	主に帰国後の取組みや成果について報告。

- ② 各グループは、所定の期日までにグループ報告書(日本語)をACCUに提出する。
(ACCUからKNCUに送付後、KNCUが韓国で発行する実施報告書へ掲載予定)

8. 旅費等諸経費

(ア) KNCU が下記について負担する。

- 往復航空運賃:日本と韓国の国際空港間のエコノミークラス航空券
- 韓国内の移動に係る経費、宿泊(シングルまたはツインルーム)、食事:但し、公式行事のない日の夕食については、支給される夕食代(1日当たり 20,000 ウォン)から参加者が支出することとする。

(イ) ACCU が下記について負担する。

- 日本国内交通費:自宅最寄駅からオリエンテーションの会場(東京)までの交通費、出発日の空港までの交通、および帰国日の到着空港からの自宅最寄駅までの交通費の定額(ACCU の規程に準ずる)。
- オリエンテーション当日(7月 11 日)の宿泊

注 1:オリエンテーション当日、開始時刻までに到着可能な交通手段がない場合に限り、前日(7月 10 日)の宿泊費を支給します。また、帰国当日中に居住地に到着可能な交通手段がない場合に限り、帰国当日(7月 18 日)の宿泊費を支給します。

注 2:本プログラムには公務にてご参加を前提としているため、期間を通して ACCU から日当は支給しません。各所属先にてご負担をお願いします。

(ウ) 各参加者は、下記について負担する。

- 海外旅行損害保険:各参加者は、プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において、海外旅行損害保険に加入しておくこと。
- 上記(1)、(2)以外の諸経費

(エ) 旅券と査証について

- 旅券(パスポート):入国時に 3ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
- 査証(ビザ):一般旅券の場合は、ビザの取得は不要。

9. 通訳

韓国国内でのプログラム期間中は日本語と韓国語間の通訳を配置する。

10. このプログラムに関する照会先

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)

人物交流部 (担当:齋藤・高松、部長:進藤)

〒162-8484 東京都新宿区袋町 6 番地 日本出版会館

TEL: 03-3269-4498 FAX: 03-3269-4510

E-MAIL: accu-exchange_ml@accu.or.jp

◆資料2.

韓国政府日本教職員招へいプログラム
(2016年7月12日-7月18日:韓国 ソウル、慶尚北道・仁川、釜山)

プログラム日程/ Programme Schedule

グループ A&B (ソウル) 2016年7月12日

Group A&B (Seoul) 12 July 2016

1日目 /Day 1	7月12日 (火) / 12 July (Tuesday)
9:25	東京成田空港出発(KE706) Departure from Tokyo-Narita Airport (KE706)
11:50	仁川国際空港到着 Arrival at Incheon International Airport
13:00-13:50	昼食 /Lunch
13:50	ソウルへ移動 / Departure for Seoul
15:00	ホテル到着及びチェックイン (世宗ホテル) Arrival and Check-in at Sejong Hotel
15:30-15:50	プログラムに関するオリエンテーション及び開会式 (世宗ホテル) Programme Orientation and Opening Ceremony (Sejong Hotel)
15:50-16:30	韓国の教育についての講義 / Lecture on Korean Education
16:30-17:00	韓国の ASPnet 紹介 : ESD と GCED / Introduction of Korean ASPnet : ESD and GCED
17:00-18:00	休憩 / Break time
18:00-20:00	歓迎晩餐会 (世宗ホテル3階 世宗ホール) Welcome Reception at Sejong Hall, Sejong Hotel 3F)

グループ A (慶尚北道) 2016年7月13日-16日

Group A (Gyeongsangbook-do) 13 - 16 July 2016

2日目 /Day 2	7月13日 (水) / 13 July (Wednesday)
9:00	ホテル出発 / Departure from Hotel
9:30-14:00	泳薰国際中学校訪問 (ユネスコスクール) (学校給食) Visit to Younghoon International Middle School (ASPnet) (School Lunch)
14:00	ホテルへ移動 / Departure for Hotel
14:30	休憩 / Break time

3 日目 /Day 3	7 月 14 日 (木) /14 July (Thursday)
9:30	ホテル出発/ Departure from Hotel
13:00-14:00	昼食/ Lunch
14:30-15:30	慶尚北道教育庁訪問 / Visit Gyeongsangbuk-do Educational research
16:15	ホテル到着及びチェックイン (安東グランドホテル) Arrival at Andong Grand Hotel and Check-in
18:00-20:00	歓迎晩餐会 (安東グランドホテル) / Welcome Reception at Andong Grand Hotel
4 日目 /Day 4	7 月 15 日 (金) /15 July (Friday)
8:40	ホテル出発 / Departure from Hotel
9:00-13:30	吉州小学校訪問 (ユネスコスクール) (学校給食) Visit to Kilju Elementary School (ASPnet) (School Lunch)
14:00-16:30	安東永明学校訪問 (ユネスコスクール、特別支援学校) Visit to Andong Young Myung School (ASPnet, Special School)
16:30-17:30	プログラム評価会 (安東永明学校) / Group Discussion at Andong Young Myung School
18:30-19:30	夕食 / Dinner
20:00	ホテル到着 / Arrival at Hotel
5 日目 /Day 5	7 月 16 日 (土) /16 July (Saturday)
9:00	チェックアウト & ホテル出発 Check-out and Departure from Hotel
10:00-10:30	芙蓉臺見学 / Visit to Buyongdae
11:00-11:30	屏山書院見学 / Visit to Byeongsan Seowon
11:40-12:15	昼食 / Lunch
12:30-14:30	安東河回村見学 / Visit to Andong Hahwe Maul
15:20-15:45	ホテル到着および休憩 / Arrrival at Andong Grand Hotel, Break Time)
16:00-20:00	ホームビジット / Home Visit

グループ B (仁川) 2016 年 7 月 13 日-16 日

Group B (Incheon) 13 - 16 July 2016

2 日目 /Day 2	7 月 13 日 (水) / 13 July (Wednesday)
9:00	ホテル出発 / Departure from Hotel

9:30-14:00	鹽光中学校訪問（ユネスコスクール）（学校給食） Visit to Yumkwang Middle School (ASPnet) (School Lunch)
14:00	ホテルへ移動 / Departure for the Hotel
14:30	休憩 / Break time
3 日目 /Day 3	7月 14日（木）/14 July (Thursday)
9:30	ホテル出発 / Departure from Hotel
11:00-12:00	仁川広域市教育庁訪問/Visit Incheon Metropolitan City Office of Education
12:10-13:00	昼食 / Lunch and Break time
13:30-16:00	彌鄒忽外国语高等学校訪問（ユネスコスクール） Visit to Michuhol Foreign Language High School (ASPnet)
16:20	ホテル到着及びチェックイン（松島セントラルパークホテル） Arrival at the Hotel and Check-in (The Central Park Hotel Songdo)
18:00-20:00	歓迎晩餐会（松島セントラルパークホテル） Welcome Reception at the Central Park Hotel Songdo
4 日目 /Day 4	7月 15日（金）/15 July (Friday)
8:00	ホテル出発 Departure from Hotel
9:00-13:00	仁川陽村中学校訪問（ユネスコスクール）（学校給食） Visit to Incheon Yangcheon Middle School (ASPnet) (School Lunch)
13:30-15:30	仁川萬壽高等学校訪問（ユネスコスクール） Visit to Incheon Mansu High School (ASPnet)
15:40-17:30	教育交流会（仁川萬寿高等学校） Discussion with Korean teachers at Incheon Mansu High School
18:00	休憩 / Break time
5 日目 /Day 5	7月 16日（土）/16 July (Saturday)
9:00	ホテル出発 Departure from Hotel
9:20-10:20	仁川広域市延壽図書館訪問/Visit to Incheon Yeonsu Public Library
11:00-13:15	月尾公園見学・昼食 / Visit to Wolmi Park / Lunch Time
14:00-14:50	ホテル到着、休憩 / Arrival at Hotel, Break Time
14:50-15:50	プログラム評価会（松島セントラルパークホテル）/ Group Discussion at The Central Park Hotel Songdo
16:00-20:00	ホームビジット / Home Visit

グループ A&B (釜山) 2016 年 7 月 17 日-7 月 18 日

Group A & B (Busan) 17 -18 July 2016

6 日目 /Day 6	7 月 17 日 (日) /17 July (Sunday)
8:00 9:00	Group B チェックアウト & 釜山へ移動 Group A チェックアウト & 釜山へ移動 Checkout from Hotel and departure for Busan
12:30	A グループ昼食 (イビスアンバサダー釜山) / Group A's Lunch at Ibis Ambassador Busan
13:00	B グループ昼食 (イビスアンバサダー釜山) / Group B's Lunch at Ibis Ambassador Busan
14:00-14:30	ホテルチェックイン (イビスアンバサダー釜山) Check-in at Ibis Ambassador Busan
14:30-15:30	報告会 (イビスアンバサダー釜山) Debriefing Session (Ibis Ambassador Busan)
15:30-16:00	閉会式 (イビスアンバサダー釜山) Closing Session (Ibis Ambassador Busan)
16:00	休憩 / Break time
7 日目 /Day 7	7 月 18 日 (月) /18 July (Monday)
	帰国準備 / Preparation for Return
6:30	チェックアウト & 金海国際空港へ移動 Check-out from Hotel and Departure for Gimhae International Airport
8:55-10:20	大阪一関西行き(KE731) / 大阪到着 Departure from Busan for Osaka-Kansai (KE731) / Arrival at Osaka-Kansai Airport
9:15-10:20	福岡一福岡行き(KE783) / 福岡到着 Departure from Busan for Fukuoka (KE783) / Arrival at Fukuoka Airport
9:30-11:35	東京一成田行き(KE715) / 東京到着 Departure from Busan for Tokyo-Narita (KE715) / Arrival at Tokyo-Narita Airport

◆資料3.

2015-2016年 韓国政府日本教職員招へいプログラム 参加者リスト

<Aグループ>

1. 参加教職員(22名)

☆団 長:A-01 金澤 裕司(KANAZAWA Yuji)

☆A-01	金澤 裕司	KANAZAWA	Yuji	北海道羅臼町教育委員会	自然環境教育主幹
A-02	阿部 紀子	ABE	Noriko	横浜市立永田台小学校	教諭
A-03	青木 宣廣	AOKI	Nobuhiro	山ノ内町立東小学校	教諭
A-04	本田 将貴	HONDA	Masataka	八千代市立勝田台小学校	教諭
A-05	今本 雅隆	IMAMOTO	Masataka	熊野町立熊野第四小学校	教諭
A-06	糟谷 明洋	KASUYA	Akihiro	気仙沼市立気仙沼小学校	主幹教諭
A-07	小林 淨子	KOBAYASHI	Joko	多摩市立東愛宕中学校	主任養護教諭
A-08	三橋 徹	MITSUHASHI	Tetsu	千葉県立桜が丘特別支援学校	教諭
A-09	百田 明弘	MOMOTA	Akihiro	町田市立小山田小学校	主幹教諭
A-10	森本 朝子	MORIMOTO	Asako	横浜市立幸ヶ谷小学校	教諭
A-11	森谷 亨	MORIYA	Toru	狛江市立狛江第三小学校	主幹教諭
A-12	野田 裕行	NODA	Hiroyuki	八千代市立萱田小学校	教諭
A-13	大場 一輝	OBA	Kazuteru	狛江市立緑野小学校	校長
A-14	大野 正巳	OHNO	Masami	市川市立鶴指小学校	教諭
A-15	坂本 尚毅	SAKAMOTO	Naoki	狛江市教育委員会教育部指導室	指導主事
A-16	柴田 芳作	SHIBATA	Hosaku	狛江市立狛江第一小学校	教諭
A-17	菅原 綾	SUGAWARA	Aya	登米市立米谷小学校	教諭
A-18	菅谷 万紀	SUGAYA	Maki	狛江市立狛江第六小学校	教諭
A-19	鈴木 文哉	SUZUKI	Fumiya	狛江市立和泉小学校	教諭
A-20	竹谷 正明	TAKEYA	Masaaki	狛江市立狛江第五小学校	主任教諭
A-21	内田 敦子	UCHIDA	Atsuko	埼玉大学教育学部附属中学校	教諭
A-22	梅澤 一久	UMEZAWA	Kazuhsia	千葉県教育庁教育振興部生涯学習課	班長兼社会教育主事

2. 文部科学省同行(1名)

A-23	岡本 彩	OKAMOTO	Aya	文部科学省	国際統括官付ユネスコ振興推進係長
------	------	---------	-----	-------	------------------

3. 事務局(公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター)(2名)

A-24	進藤 由美	SHINDO	Yumi	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流部 部長
A-25	斎藤 盛午	SAITO	Seigo	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流部

**2015-2016年 韓国政府日本教職員招へいプログラム
参加者リスト**

<Bグループ>

1. 参加教職員(21名)

☆副団長:B-01 根本 明彦(NEMOTO Akihiko)

☆B-01	根本 明彦	NEMOTO	Akihiko	千葉黎明高等学校	教頭
B-02	福井 宏和	FUKUI	Hirokazu	MIHO美学院中等教育学校	教諭
B-03	羽田 真	HADA	Makoto	早稲田大学本庄高等学院	教諭
B-04	細田 理絵	HOSODA	Rie	寝屋川市立第十中学校	養護教諭
B-05	梯 泰三	KAKEHASHI	Taizo	阿波市立吉野中学校	教諭
B-06	金田 亜妃子	KANEDA	Akiko	東京都立墨田川高等学校	教諭
B-07	川島 勇行	KAWASHIMA	Isayuki	東京都立国際高等学校	主任教諭
B-08	小林 美帆	KOBAYASHI	Miho	八千代市立萱田中学校	教諭
B-09	久保木 絵美	KUBOKI	Emi	千葉県立船橋豊富高等学校	教諭
B-10	宮坂 武志	MIYASAKA	Takeshi	浅野中学・高等学校	教諭
B-11	中村 弘子	NAKAMURA	Hiroko	長野県中野西高等学校	教諭
B-12	西山 直子	NISHIYAMA	Naoko	福岡県立戸畠工業高等学校	教諭
B-13	野村 直美	NOMURA	Naomi	沖縄県教育庁文化財課	指導主事
B-14	大久保 聖子	OKUBO	Seiko	千葉県立鎌ヶ谷西高等学校	教諭
B-15	尾崎 さおり	OZAKI	Saori	千葉県八千代市教育委員会	指導主事
B-16	佐倉 俊	SAKURA	Shun	長野県教育委員会事務局 教学指導課	主幹指導主事
B-17	佐山 好英	SAYAMA	Yoshihide	渋谷区立原宿外苑中学校	教諭
B-18	瀧谷 瑞江	SHIBUTANI	Mizue	加古川市立加古川中学校	養護教諭
B-19	新長 太	SHINCHO	Futoshi	広島県立安古市高等学校	教諭
B-20	橘 隼人	TACHIBANA	Hayato	自由学園男子部中等科・高等科	教諭
B-22	山崎 秀規	YAMASAKI	Hideki	三重大学教育学部附属中学校	教諭

2. 主催者(国際連合大学)(1名)

B-24	古田 知美	FURUTA	Tomomi	国際連合大学サステイナビリティ高等研究所	事務局長
------	-------	--------	--------	----------------------	------

3. 事務局(公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター)(1名)

B-25	高松 彩乃	TAKAMATSU	Ayano	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流部
------	-------	-----------	-------	----------------------	-------

◆資料4.

2015-2016 年国際教育交流事業 韓国政府日本教職員招へいプログラム 関係機関連絡先 (2016年7月現在)

1. 全体プログラム

◆ユネスコ国内委員会/Korean National Commission for UNESCO 政策事業本部教育チーム Education Team, Division of Policy & Programmes

住所：ソウル特別市中区明洞通り（ユネスコ通り）26 〒100-810
 Address: 26 Myeongdong-gil(UNESCO Road), Jung-gu, Seoul 100-810 Korea
 URL: <http://www.unesco.or.kr/>
 Tel: 82 (0)2 6958 4157 / Fax: 82 (0)2 6958 4254
 E-Mail : unescoteacher@unesco.or.kr

事務総長 Secretary-General 閔東石(ミン・ドンソク) Mr.MIN Dong-seok

事業部部長 Assistant Secretary-General 林賢默(イム・ヒョンムク) Mr. LIM Hyun Mook

教育チーム長 Director / Division of Education 徐賢淑(ソ・ヒョンスク) Ms. SEO Hyun Suk

教育チーム担当者・A グループ担当 Programme Officer 李智銀(イ・ジウン) Ms. LEE Ji Eun

教育チーム B グループ担当 Programme Specialist 洪輔江(ホン・ボガング) Ms. HONG Bogang

教育チーム Programme Assistant 具スルチョロン(ク・スルチョロン) Ms. KOO Seulcholong

教育チーム Programme Assistant 權珠賢(クォン・ジュヒョン) Ms. KWON Joo hyun

◆教育部/Ministry of Education

国際協力官国際教育協力担当官
 International Education Cooperation Division, International Cooperation Bureau
 住所：世宗特別自治市ガルメ路 408 政府世宗庁舎 14 棟教育部 〒339-012
 Address: Central Government Complex, 209 Sejeong, 408 Galme-ro, Sejong 339-012, Korea
 URL: <http://www.moe.go.kr>
 Tel: 82(0)2 6222 6060/ Fax: 82(0)2 2100 6133

2. グループプログラム受入れ教育庁

◆Group A 慶尚北道教育庁/ Gyeongsangbuk-do Office of Education

住所：慶尚北道安東市豊川面道應大路 511 〒36759
 Address: 511 Docheong-daero, Pungcheon-myeon, Andong-si, Gyeongsangbuk-do, 36759, Korea
 URL: <http://www.gbe.kr/>
 Tel: +82-54-805-3000/Fax: +82-54-805-3149

教育長/Superintendent : 李英雨(イ・ヨンウ) Mr. LEE Young Woo

プログラム担当/Programme Coordinator : 李孝淑(イ・ヒョスク) Ms. YI Hyo Suk

◆Group B 仁川広域市教育庁/ Incheon Metropolitan City Office of Education

住所：仁川広域市南洞区定刻路 9 〒21554
 Address: 9 Jeong Gak-ro, Namdong-gu, Incheon Metropolitan City, 21554, Korea
 URL: www.ice.go.kr
 Tel: +82-32-423-3303/Fax: +82-32-423-0159

教育長/Superintendent : 李清淵(イ・チョンヨン) /Mr. LEE Cheong Yeon

プログラム担当/Programme Coordinator : 黄芝花(ファン・ジファ) /Ms. HWANG Ji Hwa

3. 受入れ校

Group A

◆泳薰国際中学校 Younghoon International Middle School

住所 : ソウル特別市江北区道峰路 13-19 〒01211
Address: 19, Dobong-ro 13 Gagil Kangbuk-gu, Seoul, 01211, Korea
Tel: +82-2-970-4601/Fax: +82-8-980-7209
教頭/Vice-Principal : 辛奇柱 (シン・ギジュ) Mr. SHIN Gi Ju
プログラム担当/Programme Coordinator : 宋夏英 (ソン・ハヨン) Ms. SONG Ha Young

◆吉州小学校/ Kilju Elementary School

住所 : 慶尚北道安東市慶東路 947-20 〒36723
Address: 947-20, Gyeongdong-ro, Gyongbuk, 36723, Korea
Tel: +82-54-821-4210/Fax: +82-54-821-5373
校長/Principal : 張國洙 (チャン・グクス) Mr. JANG Gook Su
プログラム担当/Programme Coordinator : 崔娟實 (チエ・ヨンシル) Ms. CHOI Yeon Sil

◆安東永明学校/ Andong Young Myung School

住所 : 慶尚北道安東市北後面山藥 12 〒36614
Address: 12 Sanyak-kil, Bukgo-myeon, Andong-si, Gyeongsangbuk-do, 36614, Korea
Tel: +82-54-841-8201/Fax: +82-54-841-9663
校長/Principal : 裴榮哲 (ペ・ヨンチョル) Mr. BAE Young Chul
プログラム担当/Programme Coordinator : 李美景 (イ・ミギョン) Ms. LEE Mi Kyung

Group B

◆鹽光中学校/ Yumkwang Middle School

住所 : ソウル特別市蘆原区月溪路 45 街-9 〒139-724
Address: 9, Wolgye-ro 45ga-gil, Nowon-gu, Seoul, 139-724, Korea
Tel: +82-2-906-1103/Fax: +82-2-996-8145
校長/Principal : 李炳坤 (イ・ビヨンゴン) Mr. LEE Byung Gon
プログラム担当/Programme Coordinator : 姜晟 (カン・ソン) Mr. KANG Sung

◆彌鄒忽外国语高等学校/ Michuhol Foreign Language High School

住所 : 仁川広域市南洞区論峴洞 767-2 〒21684
Address: 767-2, Nonhyeon-dong, Namdong-gu, Incheon, 21684, Korea
Tel: +82-32-442-0963/Fax: +82-32-442-0968
校長/Principal : 鄭正浩 (ジョン・ジョンホ) Mr. JEONG Jeong Ho
プログラム担当/Programme Coordinator : 崔東錫 (チエ・ドンソク) Mr. CHOI Dong Seok

◆仁川陽村中学校/ Incheon Yangchon Middle School

住所 : 仁川広域市桂陽区長堤路 948, 13 〒21028
Address: 13, Jangje-ro 948, Gyeonggi-do, Incheon, 21028, Korea
Tel: +82-32-555-9540/Fax: +82-32-555-9549
校長/Principal : チャン・ソクヒョン Mr. CHANG Suck Hyun
プログラム担当/Programme Coordinator : 李明姫 (イ・ミョンヒ) Ms. LEE Myung Hee

◆仁川萬壽高等学校/ Incheon Mansu High School

住所 : 仁川広域市南洞区ジャンスン路 91 〒21592
Address: 91, Jangseung-ro, Namdong-gu, Incheon, 21592, Korea
Tel: +82-32-473-0372/Fax: +82-32-473-0374
校長/Principal : 李海景 (イ・ヘギョン) Ms. LEE Hae Kyoung
プログラム担当/Programme Coordinator : 高玉蘭 (コ・オクラン) Ms. Ko Og Ran

◆資料5.

過去のプログラム実績

実施期間	訪問地	訪問人数
2003年3月16日～20日	ソウル、慶州、釜山	11名
2004年6月13日～18日	ソウル、慶州、釜山	16名
2005年9月5日～13日	ソウル、慶州、釜山	24名
2006年6月11日～18日	ソウル、光州、釜山	25名
2007年6月10日～17日	ソウル、大田、清州、慶州、釜山	29名
2008年8月19日～28日	ソウル、慶州、釜山	52名
2009年8月26日～9月4日	ソウル、統営、安東、釜山	53名
2010年8月25日～9月3日	ソウル、原州、清州、釜山	53名
2011年8月26日～9月4日	ソウル、昌原、順天、慶州、釜山	53名
2012年8月29日～9月7日	ソウル、水原、大田、論山、公州、釜山	53名
2013年8月22日～8月29日	ソウル、清州、春川、原州	50名
2014年8月26日～9月1日	ソウル、春川、楊口、高城、清州、忠州、丹陽	50名
2015年8月25日～8月31日	ソウル、全羅南道、京畿道、釜山	50名
2016年7月12日～7月18日	ソウル、慶尚北道、仁川、釜山	48名
		計 567名

●国際連合大学 2015-2016 年国際教育交流事業●

韓国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書

2016 年 9 月

編集・発行

国際連合大学

〒150-8925

東京都渋谷区神宮前 5-53-70

URL <http://jp.unu.edu/>

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

〒162-8484

東京都新宿区袋町 6 日本出版会館

電話 (03) 3269-4498

URL <http://www.accu.or.jp>

Printed in Japan by WACO Inc. [200]

©2016 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)